

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第138集

や し き
屋 敷 遺 跡

一般国道10号花見改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では一般国道10号花見改良事業に伴い、平成13年度に屋敷遺跡の発掘調査を行いました。調査の結果、本遺跡では縄文時代早期と中世から近世にかけての遺構や遺物を確認しました。

縄文時代早期の文化層からは集石遺構や寨ノ神式土器のほかに大分県国東半島の北に位置する姫島産黒曜石が数多く出土するなど当時すでに広域の地域間交流があったことが明らかになりました。

また、検出された中世から近世の遺構や14世紀代の貿易陶磁などの存在は「屋敷」の名が示すとおりこの地に居を構えた人々の生活の様子を垣間見せるものであり、この地域の該期の様相を解明する上での貴重な資料となりました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心から謝意を表します。

平成19年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

例 言

- 1 本書は一般国道10号花見改良事業に伴い宮崎県教育委員会が実施した屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局宮崎工事事務所（現、宮崎河川国道事務所）の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査の期間および調査体制は第1章のとおりである。
- 4 現地での実測図は、玉利勇二・橋本英俊・柳田晴子が作成した。
- 5 本書に使用した写真は、玉利勇二・橋本英俊が撮影し、空中写真については（有）スカイサーベイ九州に、基準点測量・グリッド杭設定は（株）高岡コンサルタントに委託した。
- 6 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは主として橋本が行い、一部を整理作業員の協力を得た。
- 7 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図『日向本庄』を基に作成した。
- 8 土層断面および土器の色調表記は農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠った。
- 9 本書で使用した方位は、座標北（G、N）と表示するもの以外はすべて磁北（M、N）である。座標は世界測地系に拠る。レベルは海拔絶対高である。
- 10 本書では、遺構に次の略号を使用している。
SE・・・溝状遺構 SH・・・ピット SI・・・集石遺構 SZ・・・不明石組遺構
- 11 本書の執筆は第1章第1節を飯田博之が行い、その他と編集は橋本が担当した。
- 12 出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	遺跡の位置と環境	2
第II章	調査の概要	
第1節	調査の経過	5
第III章	調査の記録	
第1節	A区の調査	6
1	A区の調査概要	6
2	A区の基本層序	6
3	遺構と遺物	8
第2節	B区の調査	
1	B区の調査概要	13
2	B区の基本層序	13
3	縄文時代の遺構と遺物	13
4	時期不明の遺構と遺物	23
第IV章	まとめ	38

挿図目次

第1図	屋敷遺跡と周辺の遺跡位置図 (S=1/50,000)	3
第2図	調査範囲および周辺地形図 (S=1/5,000)	4
第3図	屋敷遺跡グリッド配置図 (S=1/1,000)	5
第4図	A区基本土層図	6
第5図	A区遺構分布図 (S=1/300)	7
第6図	屋敷遺跡A区溝状遺構平面図 (S=1/200)・土層断面図 (S=1/40)	9-10
第7図	A区石組遺構実測図 (S=1/20)	11
第8図	屋敷遺跡A区出土遺物実測図	12
第9図	B区基本土層図	13
第10図	B区遺構分布図 (S=1/300)	14
第11図	屋敷遺跡B区溝状遺構平面図 (S=1/200)・土層断面図 (S=1/40)	15-16
第12図	B区集石遺構実測図 (S=1/20)	17
第13図	屋敷遺跡B区出土縄文土器実測図 (1)	19
第14図	屋敷遺跡B区出土縄文土器実測図 (2)	20
第15図	屋敷遺跡B区出土縄文土器実測図 (3)	21
第16図	屋敷遺跡B区出土石器実測図 (1)	24
第17図	屋敷遺跡B区出土石器実測図 (2)	25
第18図	屋敷遺跡B区出土石器実測図 (3)	26
第19図	屋敷遺跡B区出土石器実測図 (4)	27
第20図	屋敷遺跡B区出土遺物実測図 (1)	29
第21図	屋敷遺跡B区出土遺物実測図 (2)	31

表 目 次

第1表	屋敷遺跡出土土器観察表(1)	32
第2表	屋敷遺跡出土土器観察表(2)	33
第3表	屋敷遺跡出土土器観察表(3)	34
第4表	屋敷遺跡出土土器観察表(4)	35
第5表	屋敷遺跡出土土器計測表(1)	36
第6表	屋敷遺跡出土土器計測表(2)	37
第7表	屋敷遺跡出土銭貨観察表	37

図 版 目 次

図版1	調査区遠景(手前からB区、A区、奥は大淀川)	40
	A区全景	
	B区全景	
図版2	A区近景(東より)	41
	B区近景(北より)	
図版3	A区溝状遺構調査風景	42
	A区石組遺構(北より)	
	B区西側土層断面	
	B区溝状遺構完掘状況(西より)	
	1号集石遺構(北より)	
	1号集石遺構完掘状況	
	2号集石遺構(北より)	
	2号集石遺構完掘状況	
図版4	A区出土遺物(内面)	43
	A区出土遺物(外面)	
	A区出土石器	
	A区出土銭貨	
	縄文土器(口縁I類)	
	縄文土器(口縁II・III類)	
図版5	縄文土器(胴部I類)	44
	縄文土器(胴部II・III類)	
	縄文土器(胴部IV・V類、底部)	
	石器1(石鏃・尖頭状石器)	
	石器2(剥片・石核)	
	石器3(石斧・磨石・石錘)	
図版6	石器4(台石1)	45
	石器5(台石2)	
	出土土器1(高坏)	
	出土土器2(壺)	
	出土土器3(内面)	
	出土土器3(外面)	
図版7	出土土器4(坏)	46
	出土土器5(高台付碗)	
	出土土器6(内面)	
	出土土器6(外面)	
	出土須恵器・陶磁器(内面)	
	出土須恵器・陶磁器(外面)	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

一般国道10号花見改良事業は、昭和25年に架設された花見橋の架け替えと渋滞緩和の目的で計画されたものである。平成4年度に都市計画決定を受け、その後、国土交通省宮崎工事事務所（現宮崎河川国道事務所）と県文化課（現文化財課）で予定地内の文化財協議を重ねてきた。路線内には1つの周知の埋蔵文化財包蔵地（池ノ内遺跡）と試掘調査が必要な部分1箇所の計2箇所の協議が必要な場所が存在した。この試掘調査が必要な部分が今回報告を行う屋敷遺跡である。試掘調査は平成13年1月9日から17日までの4日間実施し、埋蔵文化財包蔵層を確認した。調査の結果を踏まえ協議を行い、発掘調査を実施することになった。本発掘調査は平成13年5月15日から平成13年9月4日まで行われた。（飯田）

第2節 調査の組織

屋敷遺跡の調査組織は次のとおりである。

平成13年度（発掘調査）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊地 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
調査第二課調査第四係長	永友 良典
調査第二課調査第四係	
主査（調査担当）	玉利 勇二
主任主事（調査担当）	橋本 英俊
調査員（嘱託）	柳田 晴子

平成14年度（整理作業）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大園 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	野邊 文博
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
調査第二課調査第四係長	永友 良典
調査第二課調査第四係	
主任主事（報告書担当）	橋本 英俊

平成16年度（整理作業および報告書作成）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	宮園 淳一
副所長兼総務課長	大園 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
調査第二課調査第四係長	近藤 協
調査第二課調査第四係	
主任主事（報告書担当）	橋本 英俊

平成18年度（報告書作成）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	清野 勉
副 所 長	加藤 悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課長	宮越 尊
総務課総務担当主幹	高山 正信
調査第二課調査第四担当主幹	近藤 協
調査第四担当主査（報告書担当）	橋本 英俊

第3節 遺跡の位置と環境

屋敷遺跡は大淀川左岸の東諸県郡高岡町（現宮崎市高岡町）大字花見字屋敷に所在する。高岡町は宮崎県の中央部南側にあり、町中央部を霧島山系ならびに鰐塚山系に源を発した大淀川が大きく湾曲しながら東流している。町内に所在する遺跡の多くは大淀川とその支流の浦之名川・境川その他の中小河川に望む丘陵上に立地している。調査地はA区が周囲の水田よりやや高い標高約12mの沖積地であり、B区は現況がみかん畑として使用されている標高約18mの丘陵先端部とそこから現水田のある標高約10mの沖積低地に向かって延びる地形である。ここでは、屋敷遺跡に関連する縄文時代、古代から中世、近世頃の周辺遺跡を主として概要を述べる。

縄文時代の調査は、早期の調査例が最も多い。遺跡の北東約1.5kmには該期の貝殻文系？塞ノ神式が出土した城ヶ峰遺跡（城ヶ峰貝塚）（第1図4）をはじめとして天ヶ城跡（第1図70）、橋山第1遺跡（第1図13）、榎原遺跡（第1図58）、高野原遺跡（第1図47）など多くの遺跡が知られている。遺構は、集石遺構と落とし穴状遺構を中心としており、近年行われた九州縄文研究会の集成によると集石遺構については7遺跡97例が確認されている。遺物については、天ヶ城跡で、押型文土器と桑ノ丸式土器が大半を占め両者の折衷土器も出土している。橋山第1遺跡では前平、吉田、下刺峰式をはじめ平椀・塞ノ神・苦浜式土器など各型式の土器の出土がみられる。前期は飛渡遺跡（第1図32）、荒平第2遺跡（第1図36）、久木野遺跡（高岡町西部大淀川北部）などが知られ、久木野遺跡では轟B式や曾畑式土器が出土している。中期も同遺跡から春日式・大平式・岩崎下層式など各型式の土器の出土がみられる。後期の遺跡も多く、山子遺跡（第1図52）や山頭遺跡（第1図11）、橋山第1遺跡などがある。橋山第1遺跡で阿高式系土器や疑似縄文の土器が出土し、久木野遺跡では、円形竅穴住居跡とともに北久根山式土器が出土している。的野遺跡（第1図80）からは疑似縄文の土器が出土している。晩期は学頭遺跡（第1図9）で黒色磨研土器が出土している。

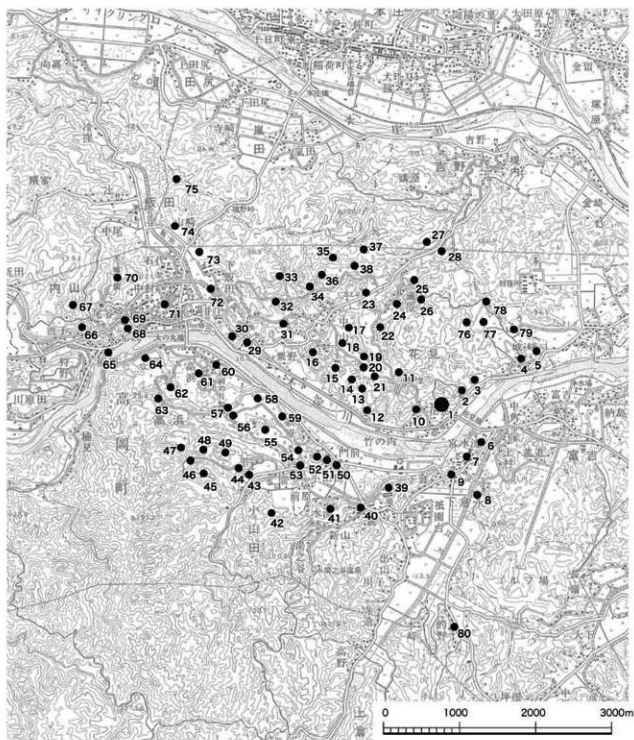
古代の高岡周辺は浄平年間（931～938年）の『和名抄』によると、当時は「穆佐郷」とよばれており、周辺の遺跡をみていくと遺跡から約4kmにある大淀川北岸の丘陵に位置する藤野遺跡（第1図22）では9世紀後半頃の土師器碗・皿などを生産した焼成遺構が6基以上検出された。また、三生江遺跡（第1図77）や的野遺跡ではほぼ同時期の越州窯系青磁碗をはじめ灰釉陶器や緑釉陶器が多く出土している。また、9世紀～10世紀にかけての土師器の高台付碗の底部に放射状の条痕や圧痕を残したものが宮崎平野を中心としてみられる。宗栄可遺跡（第1図42）や二反田遺跡（第1図34）で土師器碗が出土している。八兒遺跡（第1図6）から石鏝、胡州鏡、鉄鈴、白磁小壺等を副葬した11世紀後半から12世紀前半頃の土壌墓が検出されている。

中世は建久8（1197）年の建久園田帳によると、12世紀には「島津庄穆佐院」とよばれており、南北朝を経て島津氏と伊東氏の対立を迎えその中心となったのが穆佐城（第1図41）である。足利尊氏が九州の拠点としたことから、その後、島津久豊・忠国の居城を経て伊東氏48城の一つになる。

中世までの高岡の中心が穆佐城周辺であったのに対し江戸期になると天ヶ城周辺となる。高岡の地頭仮屋を中心に広がる高岡麓遺跡（第1図71）は計画的な街路設計で郷土屋敷群と町屋群に分割される。

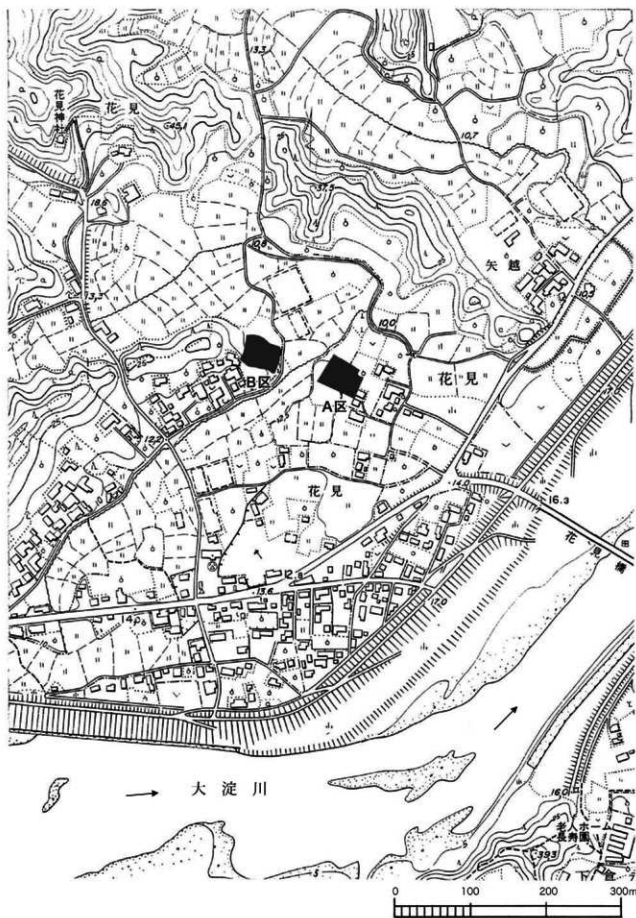
<参考文献>

- (1) 『高岡町史』1987 高岡町
- (2) 『高岡町遺跡詳細分布調査報告書』1992 高岡町埋蔵文化財調査報告第2集
- (3) 『宮崎県の地名』平凡社1997



- 1 屋敷遺跡 2 矢越遺跡 3 真直遺跡 4 城ヶ峰遺跡 5 高岡町3号墳 6 八児遺跡 7 宮水流遺跡 8 岩崎遺跡 9 学頭遺跡
 10 後田遺跡 11 山頭遺跡 12 池ノ内遺跡 13 横山第1遺跡 14 横山第2遺跡 15 横山第3遺跡 16 笹川遺跡 17 五ヶ塚1-4号墳
 18 丹後堀遺跡 19 高岡町1号墳 20 高岡町2号墳 21 山東西遺跡 22 麻野遺跡 23 長迫遺跡 24 三蔵原遺跡 25 下三蔵原遺跡
 26 高線遺跡 27 小谷遺跡 28 花見新田遺跡 29 栗野遺跡 30 上栗野遺跡 31 西ノ原遺跡 32 飛渡遺跡 33 紙原遺跡 34 二反田遺跡
 35 荒平第1遺跡 36 荒平第2遺跡 37 野中第1遺跡 38 野中第2遺跡 39 天正寺跡 40 籠遺跡 41 徳佐城跡 42 宗栄可遺跡
 43 喜呂女木遺跡 44 中ノ原第2遺跡 45 永迫第1遺跡 46 永迫第2遺跡 47 高野原遺跡 48 中ノ原第1遺跡 49 永田遺跡 50 門前遺跡
 51 僧性寺跡 52 山子遺跡 53 前原遺跡 54 中厨遺跡 55 花立原遺跡 56 鍋山遺跡 57 中ノ丸遺跡 58 榎原遺跡 59 下原遺跡
 60 香積寺跡 61 高浜遺跡 62 吹上遺跡 63 池ノ上遺跡 64 茶園朝遺跡 65 平ヶ城跡 66 尾谷城跡 67 弓袋遺跡 68 龍福寺仁王像
 69 龍福寺 70 天ヶ城跡 71 高岡籠遺跡 72 角ノ園遺跡 73 朝羽田遺跡 74 山山遺跡 75 飯田城跡 76 上三生江遺跡 77 三生江遺跡
 78 桑木遺跡 79 野間遺跡 80 的野遺跡

第1図 屋敷遺跡と周辺の遺跡位置図 (S=1/50,000)



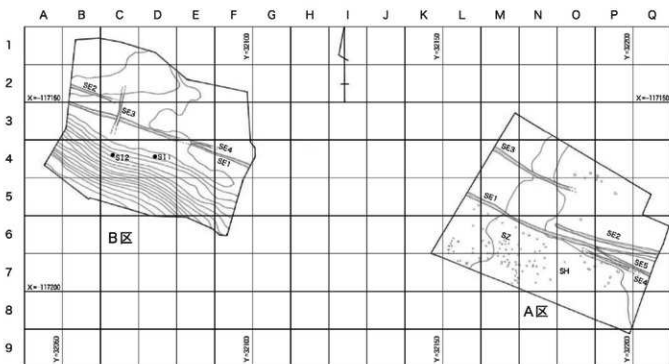
第2図 調査範囲および周辺地形図 (S=1/5,000)

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の経過

前章で述べたように、A区は周囲の水田よりやや小高い場所に立地し、B区は大淀川に向かって延びる丘陵から派生する尾根の東北側先端部と現水田へと続く沖積低地からなる。調査区の間は約60mを測りその間には比高差約2～8mの水田が広がっている。そのため、A区とB区では堆積層序が大きく異なる。調査は当初、文化課（現文化財課）の試掘調査によりアカホヤ火山灰層下で焼礫等が出土し、また現在の水田へとつながる低地部分に古代から中世の土師器が出土するなど、遺構の残存する可能性が高いB区（西側調査対象地）から開始する予定であった。花見橋に向けた工事用道路の敷設を急ぐ必要が生じたことや建物の撤去等の関係から再度協議を行った結果、東側調査対象地をA区とし、先行して調査を行うこととなった。A区はⅡ層で縄文後期の土器片が数点出土していたほかは遺構密度はあまり高くなく確認され、包含層が表土下約20～30cmと浅いため、民家の基礎部分や植林された杉によりある程度の削平が及んでいることが想定されていた。グリッド杭の設定は、西から東に向かって昇順にA・B・C・・・、北から南に向かって昇順に1・2・3・・・とし、その組み合わせでグリッドを示すこととした。変則的になるが先にB区の調査範囲を確定し、そこから東へグリッドを延していく形をとってA区のグリッド設定を行うこととした。

A区については、重機により表土を除去したところ、杉の樹根がIV層にまで及ぶことが確認され、残存する遺構に影響が及ぶことが懸念されたため、人力で伐採することとした。A区の調査面積は1,836㎡であり、Ⅱ層面から溝状遺構5条とピット群、石組遺構1基が確認された。B区は調査面積が1,952㎡である。南から北に傾斜する丘陵部はみかん栽培のため削平を受けており、重機による表土剥ぎを行った結果アカホヤ火山灰の残存状況は部分的であることが確認された。



第3図 屋敷遺跡グリッド配置図 (S=1/1,000)

残存するアカホヤ火山灰の上層でピット群を検出し、下層で集石遺構2基を確認した。さらに丘陵部分から北に向かって延びる低地部にトレンチを設定し土層を確認した結果、アカホヤ火山灰層やその下層の暗褐色土などは流出もしくは削平されたものか堆積が確認されなかった。表土下にⅢ層の黒褐色土が堆積しており布痕土器を主体とした古代の土師器が出土した。また、丘陵の下部から低地への傾斜変換点付近に4条の溝状遺構を検出した。B区北側の低地部分は標高が約10mと耕作中の水田とほぼ同程であり出土する土師器も水の影響を受けて著しい摩耗が認められた。調査が梅雨時期であり、水田耕作とも重なったため、調査区の外周に排水を兼ねた溝を掘削したにもかかわらずたびたび調査区が冠水に見舞われた。調査は平成13年5月15日から平成13年9月4日まで行った。

第三章 調査の記録

第1節 A区の調査

1 A区の調査概要

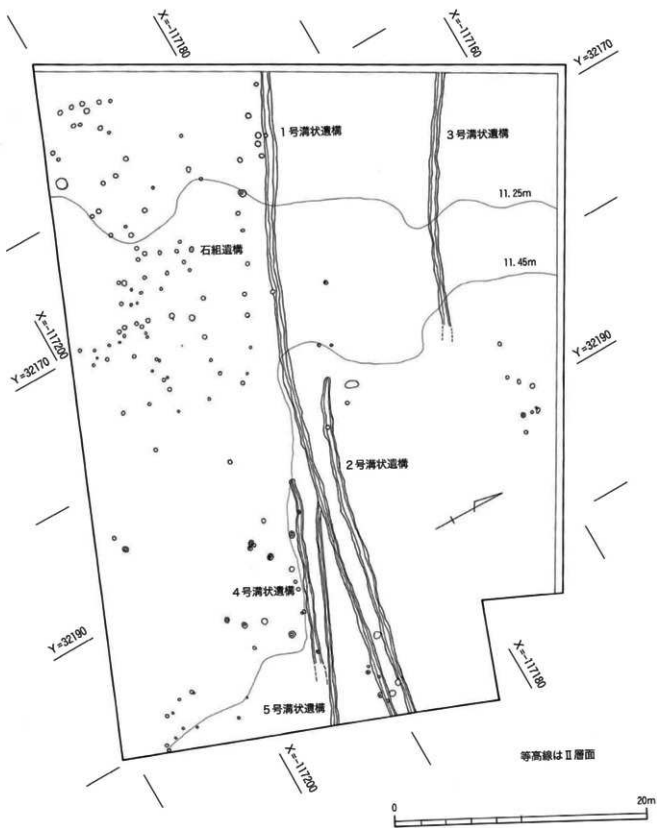
A区は周囲を水田に囲まれた標高約12mの微高地に位置している。排水を兼ねた調査区の外周トレンチをIV層まで掘削した結果、文化課の試掘において縄文土器が出土したⅡ層以下には遺物包含層は確認されなかった。そのため重機により表土を除去し、Ⅱ層を中心に人力による掘削作業を行った。当初予定していた調査区の東側部分は、建物を解体した基礎部分や構造材の埋設によってⅢ層下部付近まで攪乱を受けており、包含層の消失が認められた。そのため、一端埋め戻してプレハブ等の設営箇所および排土置き場として使用することとした。Ⅱ層が残存している範囲を精査した結果、東側から西側にかけて約0.3mの緩い傾斜を持つ地形であることが確認され、溝状遺構5条とピット群、石組遺構1基を検出した。遺物の分布状況はまばらで土師器や陶磁器、銭貨が出土した。また縄文土器と推定される小片が数点確認された。

2 A区の基本層序

基本層序は第4図のとおりであり、年代の指標となるテフラはみられない。Ⅱ層が遺物包含層である。

I	I 表土 20cm～30cm
II	II 黄褐色土 (10YR5/8) やや粘性をおびる。30cm～40cm 土師器や陶磁器、縄文土器片、敲石などが出土。中位から下位にかけて遺構の掘り込み。
III	III にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 弱い粘性をおびる。25cm～30cm
IV	IV 暗褐色粘質土 (7.5YR3/3)

第4図 A区基本土層図



第5図 A区遺構分布図 (S=1/300)

3 遺構と遺物

溝状遺構（第5・6図）

A区で確認された溝状遺構は5条で、ほぼすべてが東西方向を指向している。1号溝状遺構と2号溝状遺構は平行しておりまた3・4・5号溝状遺構も同じく平行して延びている。

1号溝状遺構（SE1）

検出された溝状遺構の中で最も長く、東側は調査区外へ延びると推定される。現存長で約50mを測り、調査区のほぼ中央を東西方向に横断するような形で検出された。幅は約0.45m（最大幅約0.95m）、検出面からの深さは東側で約0.25m、西側で約0.7mと西側の沖積低地に向かってやや深くなる傾向が認められる。断面形はU字状を呈する。P6グリッドで5号溝状遺構と切り合い、土層断面での切り合い関係から1号溝状遺構が新しいとみられる。埋土中から、尖底の布直土器の底部（第8図8）が出土している。

2号溝状遺構（SE2）

1号溝状遺構の北側に位置し、ほぼ平行する形で東西方向に延び、西側が調査区中央付近で途切れている。現存長は約27mで、幅約0.3m（最大幅約0.7m）、深さは最深部で約0.2mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。遺構の南側Q6グリッドで浅い焼土が確認され溝の埋土上層に径1mm程度の炭化物の混入が認められた。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

3号溝状遺構（SE3）

1号溝状遺構の北側約12mに位置する。東側部分はO5グリッド内で消滅しており現存長は約22mである。幅は約0.3mであり、中央部分が最も広く約0.7mである。検出面からの深さは約0.45mを測り調査区西側に向かって約0.1mの傾斜がみられる。断面形はやや底部がとがり気味のU字状を呈する。埋土はやや濡って軟質な黄褐色土である。遺構に伴う遺物の出土は認められなかった。

4号溝状遺構（SE4）

5号溝状遺構の南約1mと近接し、ほぼ平行に延びている。西側は浅くなって途切れ、東側は消失のため5号溝状遺構との新旧関係は不明である。現存長は約19m、幅約0.4～0.5mを測る。検出面からの深さは約0.45mであり、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は明黄褐色土の単一層である。遺物の出土はみられなかった。

5号溝状遺構（SE5）

遺構は東西方向に延びており、西側部分を1号溝状遺構に切られている。東側はさらに調査区外へ延びているものと考えられる。現存長は約17mを測り、幅は約0.4mである。検出面からの深さは約0.1～0.15mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は4号溝状遺構と同じく明黄褐色土一層である。遺構に伴う遺物の出土は認められなかった。

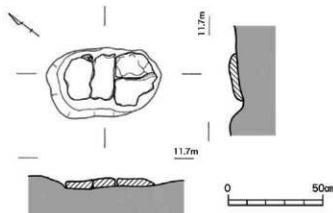
ピット群

A区で確認されたピットの中で掘立柱建物として復元できるものは確認できなかった。検出されたピット約100基のほぼ9割がSE1の南側に分布し、特にM6・M7・N6・N7グリッドを中心とした標高約11.4mの緩いテラス状の地形に集中する傾向が認められる。SH2からは、底部切り離しがヘラ切りで内湾気味に立ち上がり口縁端部が丸みをもつ土師皿（第8図4）が出土し、SH3からは内面に劃花文がみられる13世紀から14世紀代の龍泉窯系の青磁碗（第8図9）が出土している。

SH4から糸切り底を有し底部からの立ち上がりが内湾する環(第8図2)、SH5から同じく糸切り底で体部が直線的に立ち上がる土師皿(第8図5)、SH6から円錐形の器形をもつ布痕土器(第8図7)が出土している。小片のため未掲載としたがSH1、SH7をはじめ土師器や布痕土器を出土したピットが複数確認された。埋土状況からピットの多くは古代から中世までの時期のものとして推定される。

石組遺構(SZ1)

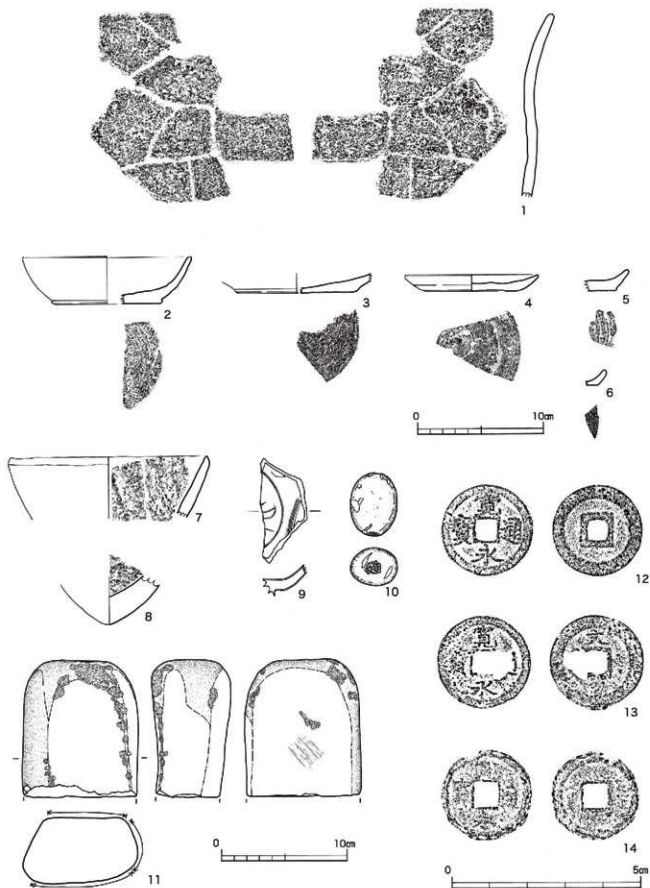
遺構はⅡ層面を精査中にM6グリッドで確認された。厚さ約5cmの扁平な砂岩4個によって構成され、推定長軸約0.6m、短軸約0.35m、深さ約0.07mを測る楕円形の浅い掘り込みを有する。主軸方向はN-145°-Wである。遺構の周囲にはピットなどはみられず、遺物の出土も確認されなかった。時期および性格についての詳細は不明である。



第7図 A区石組遺構実測図(S=1/20)

A区出土の遺物(第8図)

調査区の第Ⅱ層面を中心として出土した遺物について記す。1は、内外面ともに摩耗が著しく調整不明である。確認された縄文土器はほとんどが小片のため、ここでは後期の深鉢の可能性のあるものとして記載した。2、3は糸切り底を有する土師器の環である。2の底径は、約8.8cm、3は約9.6cmを測る。4～6は皿である。4は底部へラ切りである。5、6は小型の皿である。ともに口縁端部は丸く仕上げられる。7、8は布痕土器である。8は尖がり気味の底部である。9は龍泉窯系の青磁碗である。内面に劃花纹、見込みにへラ切りによる花纹がみられ、高台まで釉が施されている。10、11は砂岩製の敲石である。10は球形で上下両端に敲打痕が観察される。11は方形で端部と側縁に敲打痕が観察され、片面には磨痕が認められる。12～14の銭貨はすべて寛永通宝である。12は重さ1.6g、銭径は2.3cmである。13は重さ2.2g、銭径は2.5cmであり、背文に「文」の文字が認められる。14は重さ3.6g、銭径は約2.3cm。



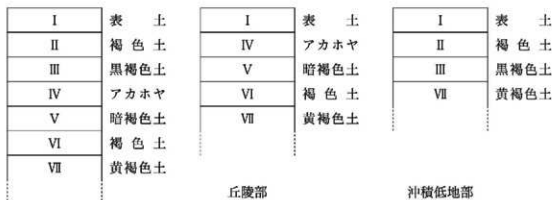
第8図 屋敷遺跡A区出土遺物実測図 (1.3.6.10~13は包含層出土)

第2節 B区の調査

1 B区の調査概要

調査区は標高約18mの丘陵部を南から北に傾斜し裾部の傾斜変換点からさらに標高を下げ沖積低地に続く。現水田との比高差は約5mを測る。排水を兼ねたトレンチでの土層断面から、傾斜変換点を境に南側の丘陵部と北側の沖積低地では土層の堆積状況に差異が認められた。重機による表土剥ぎを行った際、丘陵部はみかん栽培のため削平を受けていたためアカホヤ火山灰の残存状況に粗密があり、一部地山面が露出する箇所もみられた。アカホヤ上面での精査を行いピット群を検出した。さらに丘陵部分から北に向かって延びる低地部分までの間にトレンチを設定し土層確認を行った。その結果、丘陵部ではアカホヤ火山灰層が掃り鉢状に堆積しており下面に礫や縄文土器の出土がみられた。低地部分ではアカホヤ火山灰層やその下層の暗褐色土などは流出もしくは削平されているためか堆積が確認されず、表土下にⅢ層の黒褐色土層が堆積しており布痕土器を中心とする古代の土師器類が出土した。また、丘陵裾部の傾斜変換点付近と沖積低地部分で4条の溝状遺構を確認した。丘陵部では、残存部分のアカホヤの堆積が厚かったため調査期間とのかねあいから再度、重機を投入し除去作業を行った。精査の結果、散礫と集石遺構2基を検出した。

2 B区の基本層序

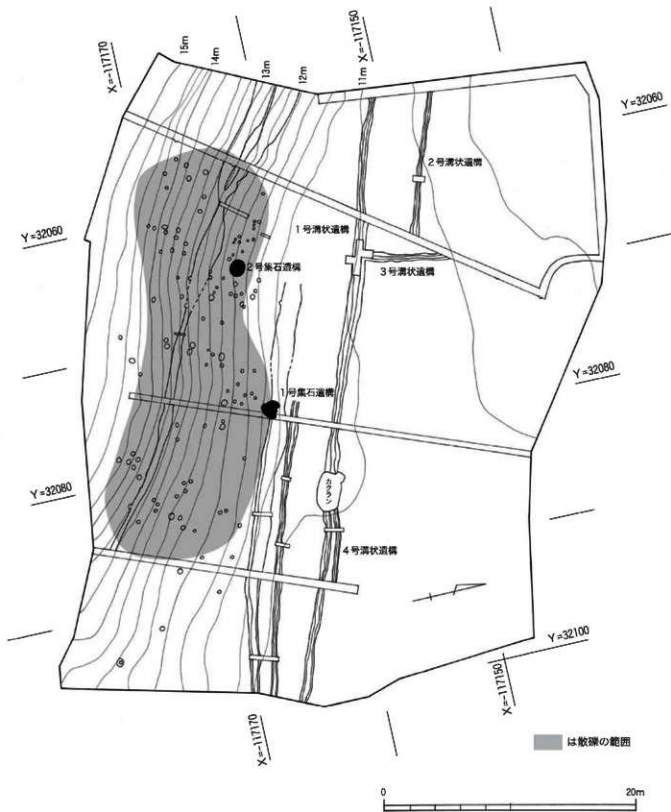


第9図 B区基本土層図

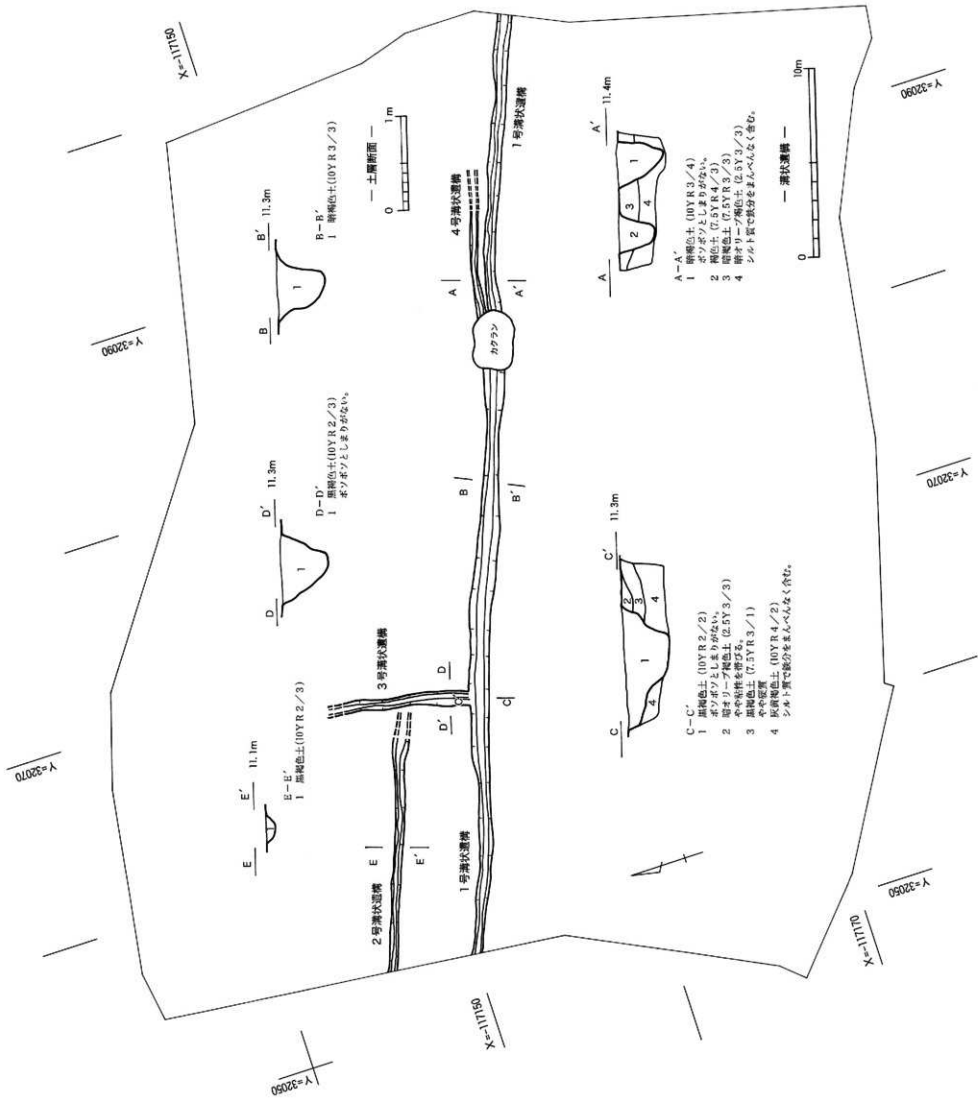
3 縄文時代の遺構と遺物

散礫 (第10図)

調査区南側丘陵部分のⅥ層上面で確認された。南側および東側は削平を受けているが、等高線に沿うように帯状に広がっている。礫の密度は一律ではなく密集する部分と散漫な部分が確認される。概して低所の裾部に礫の密度が高くなる傾向がみられるため高所からの流出の可能性もある。構成している礫は赤化した3~15cm程度の砂岩が大半を占めていた。散礫内から縄文土器や石鏝とともに集石遺構が2基検出された。



第10図 B区遺構分布図 (S=1/300)



第11図 鹿嶋遺跡B区溝状遺構平面図 (S=1/200)・土層断面図 (S=1/40)

集石遺構 (第10・12図)

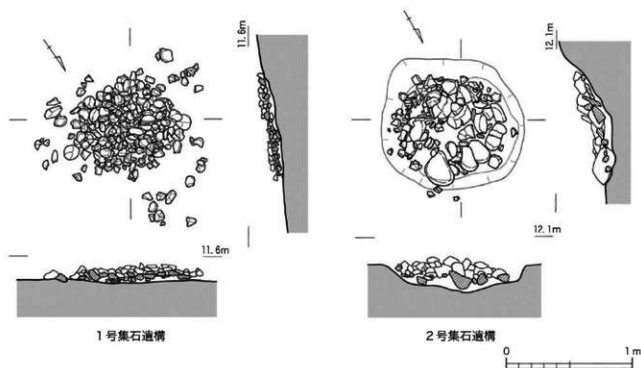
集石遺構はVI層中で2基確認された。ともに丘陵の裾部で確認され、散礫の範囲内に位置している。2つの遺構は赤化した砂岩により構成され配石をもたないという共通点をもつが、一方でいくつかの点で差異も認められる。

1号集石遺構 (S11)

D4グリッド中央やや北側で確認された。規模は長軸1.2m、短軸0.9mで掘り込みをもたない。遺構はこぶし大の赤化した砂岩の角礫や亜角礫で構成され、礫の密集度は高い。底部には配石を伴わない。遺構内からの遺物や炭化物の出土は認められなかった。

2号集石遺構 (S12)

C4グリッドの中央部で確認された。長径1.2m、短径1.0m、深さ0.25mの円形で浅めの掘り込みをもつ。赤化した砂岩の円礫、亜円礫を主として構成される。被熱のためか小さく割れた礫が遺構の南東部に混じり、中央部から北側にかけて礫の密度が薄い。大きめの円礫は赤化していない傾向が認められる。S11と比較すると礫の密集度は高くない。遺構内から最大長27.7cm、最大幅25.2cm、重さ9.4kgの砂岩製の台石 (第19図83) が出土している。埋土下部で少量の炭化物の出土が認められた。



第12図 B区集石遺構実測図 (S=1/20)

遺構外出土の遺物

縄文土器

縄文時代早期に位置づけられる土器が調査区南側の丘陵部から裾部にかけて緩やかに傾斜する地形に沿って出土した。本遺跡の縄文土器は小片が多く器形による分類が困難なため、文様や施文部位に主眼をおき、口縁から胴部を4類、胴部を5類、底部1類の10類に細分を行った。なお、個々の遺物の詳細については遺物観察表(第1・2表)を参照されたい。

口縁Ⅰ類(第13図15~17)

外器面に斜位の貝殻条痕と横位の押引きをもつ1群である。口唇部に施される刻みの有無によりa、b2類に分類した。

a類 口唇部に刻みを有する(15・16)

b類 口唇部に刻みをもたない(17)

16は、ゆるやかな波状口縁になる。同様な施文方法から18・19はⅠ類の胴部片と考えられる。

口縁Ⅱ類(第13図20~24)

口縁部に貝殻刺突が1条みられる1群である。口唇部に施される刻みの有無によりa、b2類に分類した。

a類 口唇部に刻みを有する(20~23)

b類 口唇部に刻みをもたない(24)

口縁Ⅲ類(第13図25・26)

口縁部に貝殻刺突文が多条みられるもの(25・26)

25、26ともに内外器面に丁寧なナデが施される。26の内面には屈曲がみられる。

口縁Ⅳ類(第13図27)

口縁部に刻目のある突帯をもち口唇部に刻みを有する(27)

27の内器面は横位、斜位のナデ調整が認められ、外器面は風化が著しい。

胴部Ⅰ類(第14図28~33)

沈線区画内に燃糸文(網目燃糸文を含む)を充填する1群である(28~33)

32、33は網目燃糸文を充填している。

胴部Ⅱ類(第14図34・35)

外器面に斜格子状の条痕をもつ(34・35)

35についても「壺ノ神式土器」と考えられるが天神河内第1遺跡でアカホヤ火山灰の上層から斜格子状の条痕をもった深鉢の出土がみられており断定は困難である。

胴部Ⅲ類(第14図36~38)

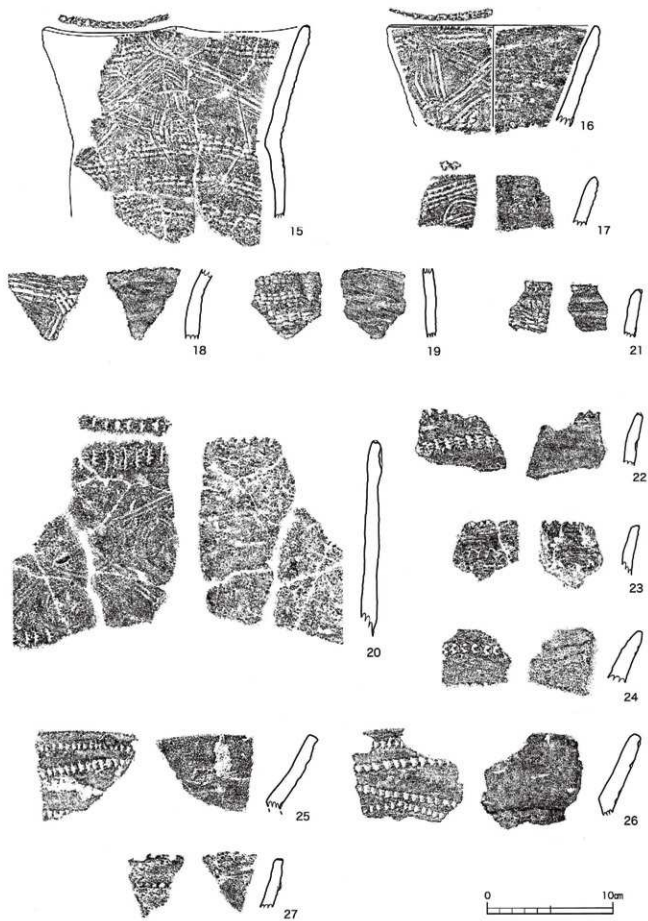
横位の貝殻条痕文と貝殻刺突文が組み合わさるもの(36~38)

口縁部に貝殻刺突が多条ある口縁Ⅲ類の胴部になる可能性がある。

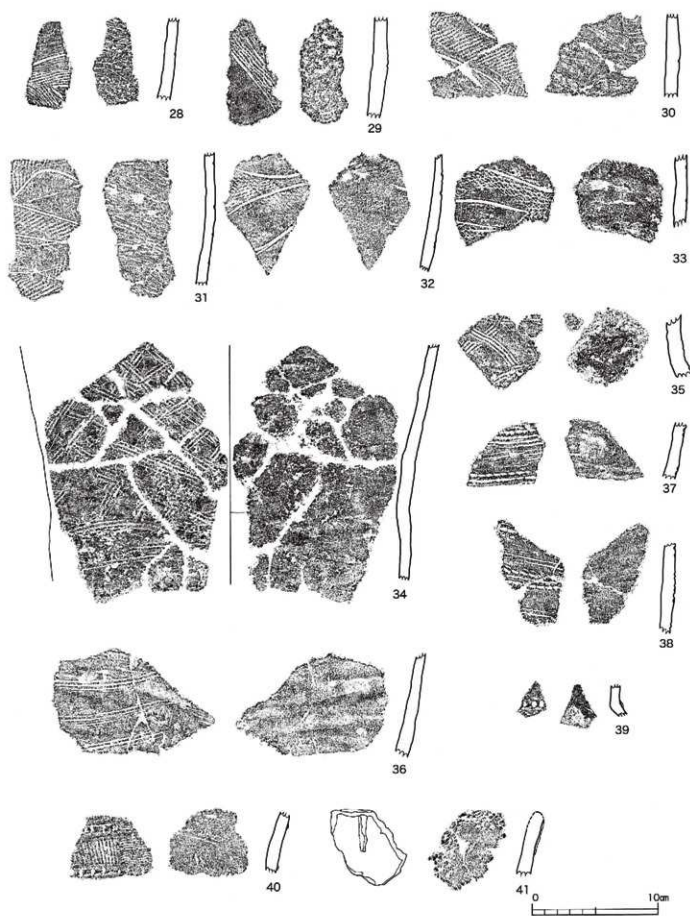
胴部Ⅳ類(第14図39~41)

突帯をもつものを一括した(39~41)

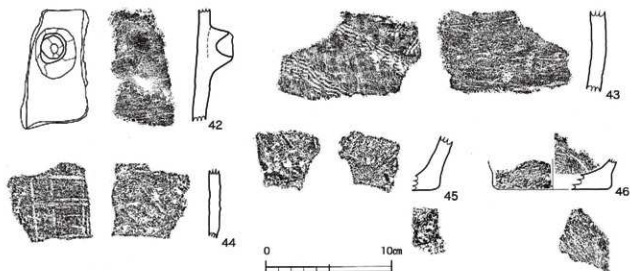
39は刻目のある横位の突帯を有する。小片であるが傾きから壺の可能性もある。40は刻目突帯が2条みられ、その突帯間に横位の波状の条痕を施し、さらに上から縦位の条痕が施される。



第13图 屋敷遺跡B区出土縄文土器実測图(1)



第14圖 屋敷遺跡B区出土縄文土器実測圖(2)



第15図 屋敷遺跡B区出土縄文土器実測図(3)

41は縦位の突帯を有する。「苦浜式土器」に相当する可能性がある。

胴部V類 (第15図42~44)

その他の胴部を一括した (42~44)

42は、外器面に瘤状の突起を有しそこに径1.5cm、深さ1.2cmの未貫通の穴が認められる。内器面の調整はナデであるが、外器面は風化が著しいため不明である。

底部 (第15図45・46)

遺跡内からはっきりと底部と認められる個体の出土は少ない。45、46ともに平底を呈し45は底径約5.4cmで厚みが薄く、46は底径約8.8cmを測りやや厚めである。

石器

石器は、石鏃、尖頭状石器、スクレイパー、剥片、石核、打製石斧、局部磨製石斧、敲石、磨石、石錘、台石などが出土した。

石鏃 (第16図47~57)

打製石鏃が11点出土している。利用石材は黒曜石が6点 (47・48・50~53) ですべて姫島産黒曜石である。次にガラス質安山岩5点 (49・54~57) である。

主として平面形態と基部形態の組み合わせにより分類を行った。平面形態を正三角形 (I類)、二等辺三角形 (II類) とし、基部形態が平基のもの (a)、凹基で抉りの浅いもの (b)、凹基で抉りが深いもの (c)、その他のもの (d) に細分する。抉りの深さの基準は、便宜的に最大長に対する抉りの深さが1/3以上あるものを深いとした。

I類-a (47)

利用石材は姫島産黒曜石である。表裏ともに粗い剥離が施され、一部自然面が残る。側縁部は直線的に延びる。

I類-b (48)

出土したのもっとも小型の石鏃で、利用石材は姫島産黒曜石である。側縁部は直線的で浅い弧状の抉りを作り出す。脚部の先端はやや丸みをおびる。

I類-c (49)

石材はガラス質安山岩である。側縁部は直線的でU字状の抉りを作り出す。脚部の先端は尖る。

II類-a (50)

利用石材は姫島産黒曜石である。側縁部はやや丸みをおびる。

II類-b (51~54)

4点とも側縁部は直線的である。51・53・54は浅い弧状の抉りを作り出し、52はU字状の抉りをもつ。51は脚部の先端が尖り、52・53の脚部の先端は丸みをおびる。

II類-c (55・56)

55・56ともに、側縁部は直線的でゆるいV字状の抉りをもつ。脚先端部が尖り気味である。

II類-d (57)

II類-aに類似するが未製品と思われる。利用石材はガラス質安山岩。

尖頭状石器 (第16図58)

58は尖頭状石器である。形態はII類-aに似るが断面が石鏃より分厚く重さも出土石鏃の平均値の約6.5倍である。石材も打製石鏃の黒曜石に対してチャートである。

スクレイパー (第16図59~62)

スクレイパーは4点出土している。すべて石材が異なっている。平面形態により(I類)と(II類)に分けられる。

I類 厚みのある剥片を用いて周縁に連続した剥離を施し弧状の刃部を形成するもの (59・60)

59は頁岩製で背面に自然面を残し、背面側から加工を施している。60はチャート製で、折損しているが加工がほぼ全周する。

II類 縦長剥片を素材とし、側縁に加工を施し刃部を形成するもの (61・62)

61は頁岩製で側縁に直線状の加工を施し刃部を形成している。62は姫島産黒曜石製で、両側縁に加工を施し刃部を形成している。

二次加工剥片 (第16図63・第17図64)

二次加工剥片は2点出土している。63は、横長の剥片を素材とし打面側の側縁に加工を施し、対面には使用痕と思われる微細な剥離が認められる。64は縦長剥片を素材とし上下端部近くの側縁に剥離がみられる。63、64ともに姫島産黒曜石製である。

使用痕剥片 (第17図65~67)

使用痕剥片は3点出土している。65は姫島産黒曜石製の縦長剥片を素材とし両側縁に微細な剥離痕がみられる。66は黒曜石製である。67は背面に自然面を残す縦長剥片を素材とし両側縁に微細な剥離が認められる。姫島産黒曜石製である。

剥片 (第17図68~70)

68はチャート製の横長剥片で背面にスカーが観察される。69はチャート製で、70は頁岩製である。ともに、打面側に自然面が残る。

石核 (第17図71~73)

71は黒色のチャートを利用石材とする石核で縦長および寸詰まりの剥片を剥離している。若干の打面転移が認められる。72は姫島産黒曜石製で不定型な剥片を剥出している。73も姫島産黒曜石を利用石材

としており打面転移を繰り返し多方向から剥片剥離を行っている。

打製石斧（第18図74・75）

74は砂岩製で全体的に剥離が粗雑で刃部が斜めになり片刃を呈している。使用により側縁が折損したものを再生使用した可能性も考えられる。75はバチ形の石斧でやや有肩気味である。摩耗が著しいため判然としないが刃部に研磨痕が認められる箇所があり局部磨製石斧の可能性もある。利用石材はホルンフェルスである。

局部磨製石斧（第18図76・77）

76は基部の大部分が欠損している。両面に数カ所、磨痕が認められる。石材は珪質頁岩である。

77は細粒砂岩製である。刃部付近が最大幅になり基部に向かって狭くなる台形状を呈する。敲打による整形後、刃部付近を丁寧に研磨している。刃部は両刃であり、使用によるとみられる剥離が認められる。

敲石（第18図78）

78は平面形態が楕円形を呈する砂岩製の敲石である。下端とその縁周に敲打痕が観察される。

磨石（第18図79・80）

79は溶結凝灰岩製の磨石である。両面および周縁の広い範囲に磨痕が認められる。80は円形で両面および側縁の一部に磨痕がみられ、両面中央に敲打痕による凹みが観察される。石材は砂岩である。

石錘（第18図81）

81は礫石錘の半折したものである。扁平な砂岩の長軸側に数度の打撃による剥離を行い抉りを作り出している。

台石（第19図82・83）

82は最大長14.9cm、最大幅14.7cm、最大厚8cmの砂岩製の台石である。片面の平坦部中央に敲打痕が認められる。83はS I 2より出土した台石で、最大長27.7cm、最大幅25.2cm、重さ9.4kgを計る。上端部とその周縁に数度の打撃による大きく粗い剥離が認められ、平坦部中央にもわずかに敲打痕が観察される。

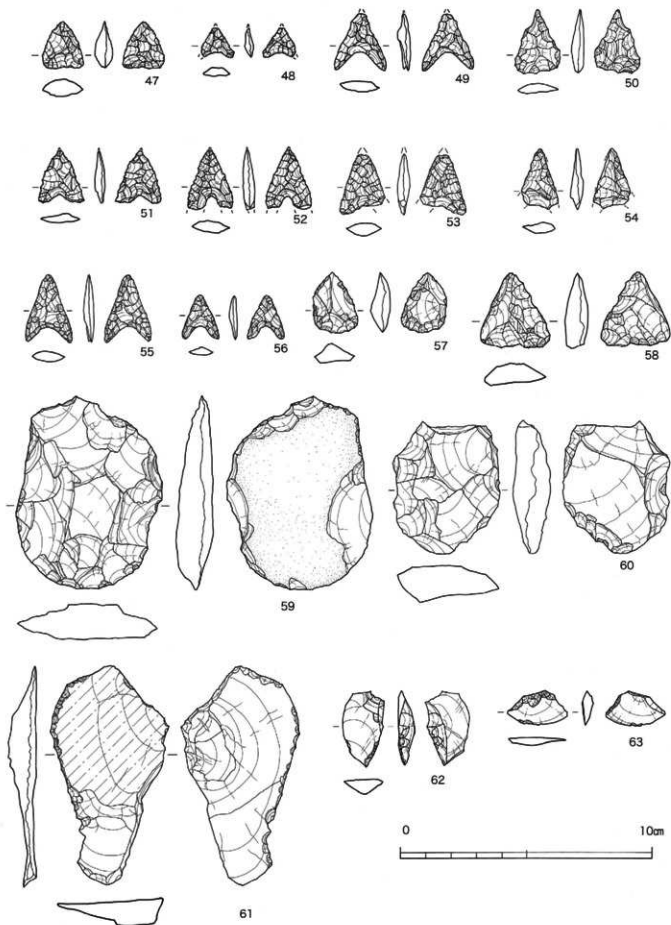
4 時期不明の遺構と遺物

溝状遺構（第10・11図）

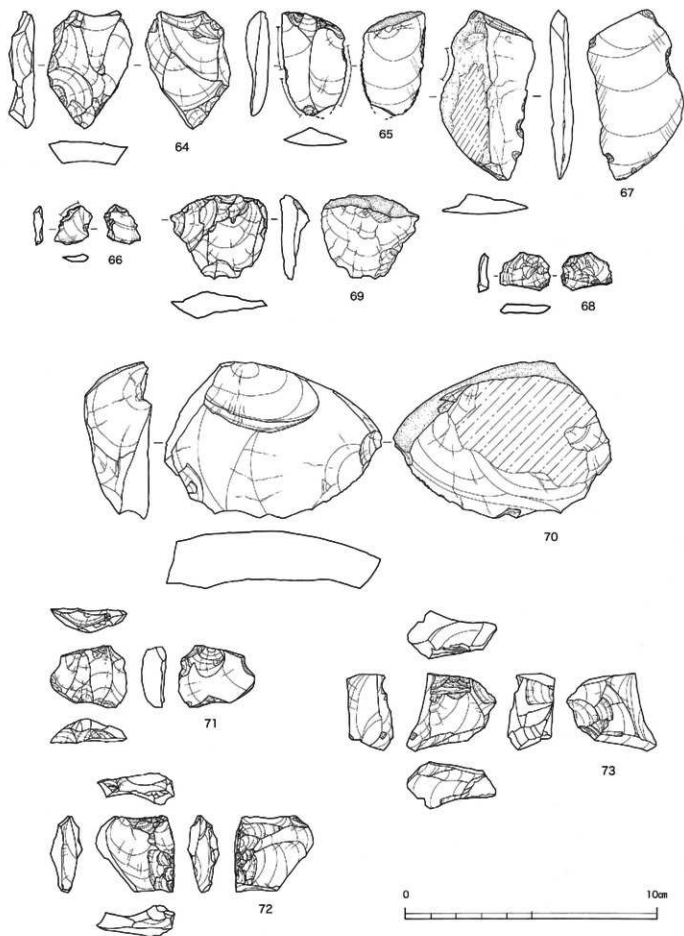
B区で溝状遺構は4条確認され、そのうち1条（SE3）が南北方向に延び、後の3条がほぼ東西方向を指向している。

1号溝状遺構（SE1）

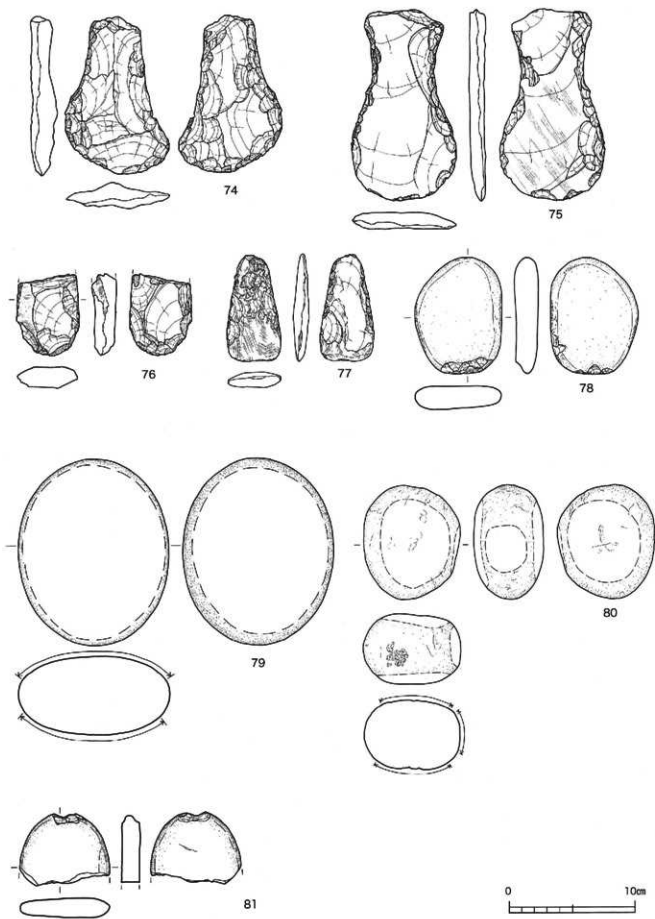
検出された溝状遺構の中で最も長く、現存長で約50mを測る。南から延びてくる丘陵の裾部を東西方向に横断するような形で検出され、東西側とも調査区外へ続くと推定される。溝状遺構の幅は約20～80cmと一定せず、検出面からの深さは東側で約50cm、西側で約45cmを測る。断面形は緩いV字状を呈する。E4グリッド付近で4号溝状遺構と切り合うと推定されるが攪乱のため新旧関係は不明である。埋土内丘陵部からの流れ込みと思われるスクレイパー（第16図60）、磨石（第18図80）が出土している。



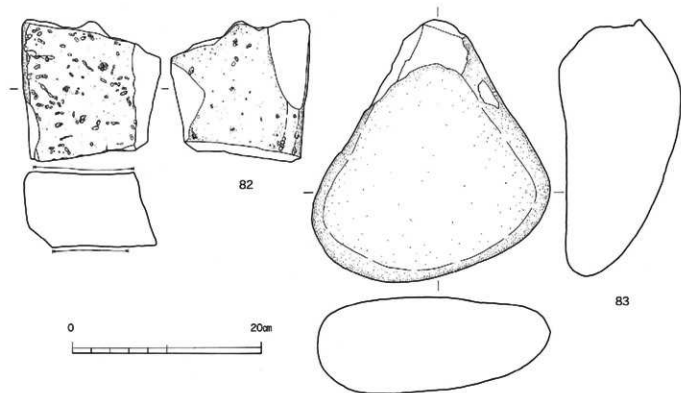
第16图 屋敦遗址B区出土石器实测图(1)



第17图 屋敷遺跡B区出土石器实测图(2)



第18图 屋敷遺跡B区出土石器实测图(3)



第19図 屋敷遺跡B区出土石器実測図(4)

2号溝状遺構 (SE2)

1号溝状遺構に北側約4mに位置し、ほぼ並行する形で東西方向に延びる。東側は途中で消失し、西側は調査区外へ延びているものと推定される。現存長は約11mで、幅約45cm、深さは5~10cmである。掘り込みは浅く、断面形は皿状を呈する。遺構に伴う遺物は出土はみられなかった。

3号溝状遺構 (SE3)

1号溝状遺構に直交する形で検出された。北側はC2グリッド内で消滅しており現存長は約7mである。幅は約0.3~0.75mと一定せず、検出面からの深さは南側に向かって深くなり最深部で約0.5mを測る。C3グリッドで1号溝状遺構と切り合う。埋土の堆積状況から1号溝状遺構より古い時期の所産と推定される。断面形はやや緩いV字状を呈する。埋土は黒褐色土の単一層であり遺構に伴う遺物の出土は認められなかった。

4号溝状遺構 (SE4)

1号溝状遺構の北側に近接し、ほぼ平行に延びている。東側は消失しており確認できなかった。木の根の攪乱のため1号溝状遺構との新旧関係は不明である。現存長は約6m、幅約0.2~0.5mを測る。検出面からの深さは最深部約0.4mで断面形はU字状を呈する。埋土は褐色土の単一層である。遺物の出土はみられなかった。

ピット群 (SH)

アカホヤ上上でピット群を検出したが掘立柱建物として復元できるものはなかった。調査期間との関係から重機によるアカホヤの除去を行ったため十分な検討はなしえなかった。未掲載であるが埋土中から土師器小片を出土するものもみられた。

遺構外の出土遺物

調査区の第Ⅲ層を中心とし出土した遺物について記す。大半は古代の土師器であり甕・坏・高台付碗・皿・甌・布痕土器がみられる。沖積低地であり、水の影響のためか摩耗が著しく、また破片が多いため、ここでは部位ごとに分類を行う。出土数は少ないものの須恵器甕、高台付碗、陶磁器等もみられる。

高坏 (第20図84)

84は高坏の胴部である。形状から古墳時代の小型の高坏と考えられる。

土師器甕 (第20図85～93)

調整が不明瞭なものが多いため、主に口縁の形態により3分類した。

口縁Ⅰ類 口縁が緩やかに外反し内面屈曲部に稜をもたないもの (85・86)

口縁Ⅱ類 口縁がくの字に外反し内面屈曲部に稜をもつもの (87～91)

a 端部が丸いもの (87～89)

89は外面にナデによる稜線をもつ。

b 端部がやや尖り気味のもの (90・91)

口縁Ⅲ類 口縁下部が厚みをもつもの (92・93)

土師器坏 (第20図94～110)

底部の切り離し痕跡は明瞭に糸切りと判断できるものはなく、すべてがヘラ切り底である。底部から体部への立ち上がりの形態により2分類した。

Ⅰ類 底部から体部への立ち上がりがあまく不明瞭である

a 体部から口縁にかけてやや外反する (94)

b 体部から口縁にかけてやや内湾する (95～99)

Ⅱ類 底部から体部への立ち上がりが明瞭である

a 薄い円盤状の底部をもつ (100～102)

b はっきりとした円盤状の底部をもつ (103)

口縁Ⅰ類 坏または碗と思われる口縁であり端部の形態により細分した。

a 口縁端部がシャープなもの (104～107)

b 口縁端部が丸いもの (108～110)

105の内面には工具によると思われる凹みが認められる。106・107は外面にナデによる稜線がみられる。

高台付碗 (第20図111～116)

高台部の形態により3分類し、端部が丸みをもつ (a)、端部が尖り気味のもの (b) に細分した。

Ⅰ類 外方にのびるもの

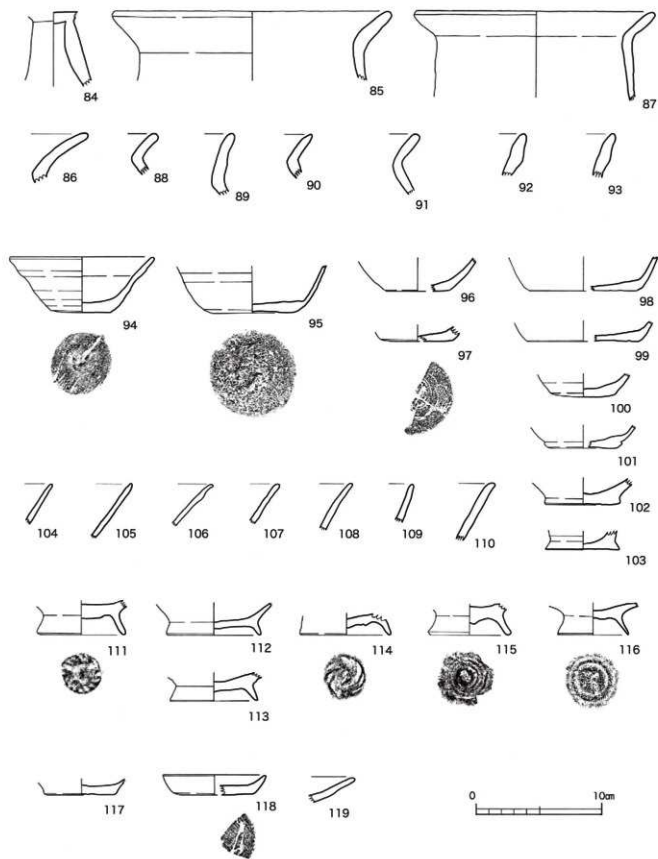
a 先端部が丸みをもつもの (111・112)

b 先端部が尖り気味のもの (113)

Ⅱ類 ほぼ直立するもの

a 先端部が丸みをもつ (114)

114の底部外面には放射状の調整痕が認められる。



第20图 屋敷遺跡B区出土遺物実測図(1)

Ⅲ類 高台が高く外方に開くもの

- a 先端部が丸みをもつもの (115)
- b 先端部が尖り気味のもの (116)

皿 (第20図117~119)

皿の出土量は杯や碗に比べると少ない。117はヘラ切り底で底径が5.4cm、118は糸切り底をもち、底部と体部の境は丸みをもつがやや内湾気味に立ち上がる。口径約8.0cm、器高1.6cm、底径約6.2cmを測る。119はやや外反気味で口縁端部はシャープである。

布痕土器 (第21図120~128)

布痕土器は、包含層中から最も多量に出土した遺物であるが、摩耗や風化のため布目の単位が確認できるものはない。器形は円錐形で外面に指頭圧痕、内面に布目圧痕がみられる。塩の生産や流通に関連する土器と考えられている。口唇部の形態は同一個体でも部分ごとに差がみられるが、便宜上断面形が明瞭に三角形となり尖るもの (Ⅰ類) と断面が三角形となるものの先端があいまいなもの (Ⅱ類) に分類した。Ⅰ類は120~124であり、Ⅱ類は125~127である。128はやや丸みをおびる底部で内面に粗い布目圧痕が認められる。

瓶 (第21図129)

129は瓶の把手である。全面にナデ調整や指頭痕がみられる。中央部の横断面は円形状を呈する。

須恵器甕 (第21図130~133)

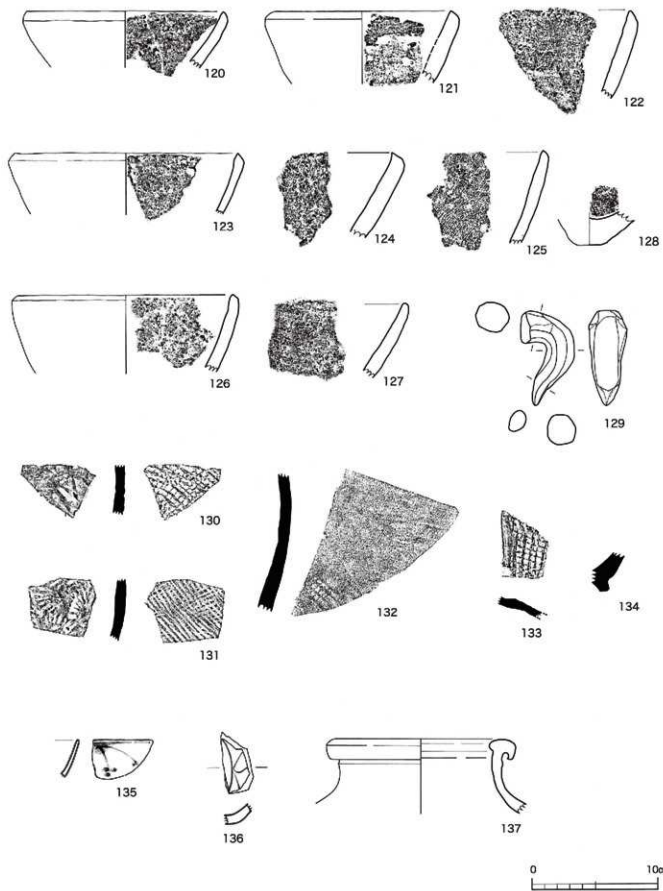
130~133は甕である。130の外面は格子目叩きで内面には放射状の当具痕がみられる。131は、外面が平行叩き、内面には車輪状の当具痕がみられる。132は比較的大型の甕の胴部片である。外面には自然釉がみられ、内面はナデ調整である。133の外面はナデの後格子目叩きが、内面はナデの後に放射状の当具痕がみられる。

高台付碗 (第21図134)

須恵器の高台付碗は1点のみ出土している。134はやや外に開く高台をもち、その高台内面は面取りされる。

陶磁器 (第21図135~137)

135は肥前系のくらわんか碗である。外面に梅樹文が表現されている。136は、劃花文をもつ龍泉窯系の青磁碗である。13~14世紀。137の口縁部は外方向に折り曲げられ口縁内面はナデにより段をもつ。肥前系の甕か。



第21图 屋敷遺跡B区出土遺物実測図(2)

第1表 屋敷遺跡出土土器観察表(1)

遺跡名	種類	部位	出土地点	法 量 (m)	手法・造形・文様ほか			色 澤		胎土の特徴	備 考	
					外 面	内 面	外 面	内 面				
1	縄文	口縁～胴部	ASZ07 II層				ナデ?	ナデ?	横 (10Y8/5)	横 (2.5Y/3) 横 (10Y8/5)	1mm以下の褐色・黄褐色、黒・金色光沢を含む	黒化が強い
2	土師器	口縁～底部	ASZ344	(12.2)	(3.6)	3.8	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色 (7.5Y8/5)	黄褐色 (7.5Y8/5)	1mm以下の赤褐色を少量含む	赤切り基
3	土師器	口縁～底部	ASZ08 II層		(3.6)		回転ナデ	回転ナデ	黄褐色 (10Y8/2) 横灰 (10Y8/1)	黄褐色 (10Y8/2) 横灰 (10Y8/1)	1mm以下の黒褐色を含む	赤切り基
4	土師器	口縁～底部	ASZ347	(10.4)	(7.0)	1.3	回転ナデ	回転ナデ	横 (2.5Y7/5) 灰赤 (2.5Y8/2)	横灰 (10Y8/1)	1mm以下の白色粉を含む	へら切り基
5	土師器	口縁～底部	ASZ345 II層			1.7	回転ナデ	回転ナデ	横 (5Y7/5)	横 (5Y7/5)	きめ細やか	赤切り基
6	土師器	口縁～底部	ASZ07 II層			1.2	回転ナデ	回転ナデ	灰赤い横 (7.5Y7/4)	灰赤い横 (7.5Y7/4)	1mm以下の褐色粉を含む	赤切り基
7	布瓦土器	口縁～胴部	ASZ346	(15.6)			ナデ	布目肌	横 (5Y7/5)	横 (5Y7/5)	5mm以下の赤褐色を含む	
8	布瓦土器	口縁	ASZ341 出土中				ナデ	布目肌	横 (5Y7/5)	横 (2.5Y8/2)	7mm以下の褐色・赤黒・灰色粉を含む	
9	青磁	高台付碗	ASZ343				造形	施釉、劃花文、見込みにへら切りによる点文	オリブ灰 (2.5Y8/1)	灰 (5Y6/1)	薄肌	黒灰肌系
15	縄文	口縁～胴部	BSZ VI層	(20.4)			踏み、ナデ、横方向の貝殻断面による押引文、斜方向の貝殻断面文	ナデ、横・斜方向のナデ、刺通	横 (7.5Y8/5) 灰赤 (10Y8/4)	横 (10Y8/5) 黄灰 (2.5Y/1)	5mm以下の黒・黄褐色、透明光沢を含む	口縁1a 波状口縁 蓋ノ形式
16	縄文	口縁	BSZ VII層	(16.4)			踏み、貝殻断面文、斜方向の貝殻断面文	横ナデ	横 (7.5Y7/5)	横赤い横 (7.5Y8/3)	2mm以下の乳白・灰色、透明光沢を含む	口縁1a 波状口縁 蓋ノ形式
17	縄文	口縁	BSZ VIII層				ナデ、横方向の貝殻断面による押引文、矢線	横ナデ	横 (7.5Y7/5)	横 (7.5Y7/5)	1mm以下の半透明、黒色光沢を含む	口縁1b 蓋ノ形式
18	縄文	口縁～胴部	BSZ VIII層				貝殻断面文、ナデ	ナデ	灰赤い横 (10Y7/4)	横 (10Y8/2)	1mm以下の黒・乳白色を含む	口縁1 蓋ノ形式
19	縄文	胴部	BSZ VIII層				貝殻断面文、貝殻断面文	斜方向のナデ	横 (5Y8/5)	横赤い横 (10Y7/4)	2mm以下の乳白・黒褐色、透明光沢を含む	口縁1無
20	縄文	口縁～胴部	BSZ VIII層				踏み、貝殻断面による波状断面文、斜方向・斜方向の貝殻断面文	ナデ	灰赤い横 (10Y8/4) 灰赤 (10Y8/2)	灰赤い横 (10Y8/4)	4mm以下の乳白・黄褐色を含む	口縁2a 折中式
21	縄文	口縁	BSZ VIII層				踏み、貝殻断面文	横ナデ	灰赤い横 (7.5Y8/4)	灰赤い横 (2.5Y/4)	1mm以下の黒色光沢を含む	口縁2a
22	縄文	口縁	BSZ VIII層				踏み、貝殻断面による波状断面文	横ナデ	灰赤い横 (10Y8/4)	灰赤い横 (10Y8/4)	1mm以下の黒褐色、透明・黒色光沢を含む	口縁2a
23	縄文	口縁	BSZ VIII層				踏み、横方向の貝殻断面文、貝殻断面文、押引き	ナデ	横 (7.5Y8/4) 灰赤い横 (7.5Y8/4)	灰赤い横 (10Y7/4)	1mm以下の乳白色、透明光沢を含む	口縁2a 蓋ノ形式?
24	縄文	口縁	BSZ VIII層				ナデ、横方向の波状断面文	ナデ	横 (5Y8/5)	灰赤い横 (10Y7/4)	2mm以下の透明・黒色光沢を含む	口縁2b 蓋ノ形式
25	縄文	口縁～胴部	BSZ VIII層				ナデ、横・斜方向の貝殻断面による押引文	横ナデ	灰赤い横 (7.5Y8/3)	灰赤い横 (7.5Y8/4)	2mm以下の灰白・黄褐色を含む	口縁2b
26	縄文	口縁～胴部	BSZ VIII層				横ナデ、横・斜方向の貝殻断面による押引文	ナデ	灰赤い横 (7.5Y8/4) 灰赤 (7.5Y8/2)	灰赤い横 (7.5Y8/4)	1mm以下の暗褐色を含む	口縁2b
27	縄文	口縁	BSZ VIII層				踏み、貝殻断面文、ナデ	ナデ	灰赤い横 (5Y8/4) 横 (7.5Y8/2)	明黄褐色 (10Y7/5)	1mm以下の乳白・半透明を含む	口縁2b 蓋ノ形式
28	縄文	胴部	BSZ VIII層				ナデ、波線、波赤文	貝殻断面、ナデ	横 (7.5Y7/5)	灰赤い横 (7.5Y8/4)	1mm以下の乳白・黒・赤褐色、透明光沢を含む	胴部1
29	縄文	胴部	BSZ VIII層				波赤文、波線、ナデ	ナデ	灰赤い横 (10Y8/4)	灰赤い横 (10Y8/4)	1mm以下の黒・乳白・褐色、透明光沢を含む	胴部1
30	縄文	胴部	BSZ VIII層				波線区画による波赤文	ナデ	横 (5Y8/5)	灰赤い横 (7.5Y8/4)	2mm以下の乳白・褐色、黒色光沢を含む	胴部1 蓋ノ形式

第2表 屋敷遺跡出土土器観察表(2)

遺跡 番号	種類	器形	部位	出土地点 層位	法 量 (g)	手法・原料・文様ほか		色 澤		胎土の特徴	備 考			
						外 面	内 面	外 面	内 面					
												厚さ	口径	高さ
31	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層				沈積区直内に残本文	ナテ	横 (5YR6/5) 黒褐 (5YR3/1)	明褐色 (7.5YR5/2)	2mm以下の乳白・褐色 斑、透明光沢を含む	胴部I 蓋ノ形式	
32	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層				ナテ、沈積区直内に明 顯残本文	ナテ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	1mm以下の黒褐色、透明 光沢を含む	胴部I 蓋ノ形式	
33	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層				ナテ、沈積区直内に明 顯残本文	ナテ	横 (5YR7/5)	明褐色 (10YR/5)	2mm以下の乳白色粒、透 明・褐色光沢を含む	胴部I 蓋ノ形式	
34	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層				折格子状・東方内の貝 殻残本文	ナテ	横 (7.5YR6/5) 明赤褐 (7.5YR5/5)	横 (7.5YR5/5)	3mm以下の乳白色粒、透明 光沢を含む	胴部II 蓋ノ形式	
35	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層				ナテ、折格子状貝殻残 本文	ナテ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	2mm以下の乳白色粒を含む	胴部II 蓋ノ形式?	
36	縄文	深鉢	胴部	B区 V層				貝殻残本文、貝殻破片 本文	横ナテ	にぶい黄 (7.5YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	3mm以下の灰・乳白色粒を 含む	胴部II	
37	縄文	深鉢	胴部	B区 V層				貝殻残本文、貝殻破片 本文	横ナテ	にぶい黄褐 (10YR5/4) 灰黄褐 (10YR5/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	1mm以下の乳白色粒、透明 光沢を含む	胴部II	
38	縄文	深鉢	胴部?	B区 VI層				横方向の貝殻残本文、 ナテ、貝殻破片本文	ナテ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	2mm以下の乳白色粒を含む	胴部II 蓋ノ形式	
39	縄文	蓋?	胴部	B区 VI層				ナテ、割目取付等	ナテ	にぶい褐 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR7/4)	1mm以下の赤褐色粒、黒 色・透明光沢を含む	胴部IV	
40	縄文	深鉢	胴部	B区 V層				2条の割目取付等、貝 殻残本文	ナテ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄 (2.5YR6/3)	3mm以下の乳白色粒、黒色 光沢を含む	胴部IV	
41	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層				割目の斜付交差、貝殻 残本文	ナテ	横 (5YR6/5)	明褐色 (10YR/5)	2mm以下の乳白色・半透明 粒を含む	胴部IV 蓋ノ形式?	
42	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層				未開透のこぶ状突起	ナテ	黄褐 (10YR6/5)	明褐色 (10YR/5)	4mm以下の黒・褐色粒、透明 光沢を含む	胴部V	
43	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層				ナテ、斜方向に波紋の 貝殻残本文	ナテ	にぶい褐 (7.5YR6/4)	灰褐 (7.5YR5/2)	3mm以下の白色粒、黒色光 沢粒を含む	胴部V	
44	縄文	深鉢	胴部	B区B3 VI層				工具による縦・横方向 の波紋文	ナテ	横 (5YR6/5)	明褐色 (10YR/5)	3mm以下の乳白色粒、褐色・ 透明光沢を含む	胴部V	
45	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層	(5.4)			貝殻残本文、割いナテ	ナテ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR6/2)	2mm以下の白・赤褐色粒、黒 色光沢粒を含む		
46	縄文	深鉢	胴部	B区 VI層	(8.0)			割いナテ	ナテ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	3mm以下の白色粒、黒色光 沢粒を含む		
84	土師器	高平	胴部	B区 III層				ナテ	ナテ	横 (2.5YR6/5)	横 (5YR6/5)	1mm以下の赤褐色粒を含む		
85	土師器	蓋	口縁～胴部	B区 B層下五	(71.8)			ナテ	ナテ	横 (2.5YR6/5)	横 (5YR6/5)	2mm以下の赤褐・乳白色粒を 含む		
86	土師器	蓋	口縁～胴部	B区 B層下五				ナテ	ナテ	淡黄褐 (10YR6/3)	淡黄褐 (10YR6/4)	3mm以下の黒・乳白・褐色粒 を含む		
87	土師器	蓋	口縁～胴部	B区 B層下五	(18.7)			ナテ	ナテ	淡黄褐 (7.5YR6/4)	横 (5YR7/5)	3mm以下の黒・赤褐・灰色 粒、透明光沢を含む		
88	土師器	蓋	口縁～胴部	B区 B層				横ナテ	横ナテ	褐灰 (7.5YR6/1)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	2mm以下の乳白色粒、透明・ 褐色光沢粒を含む	入ス内蓋	
89	土師器	蓋	口縁～胴部	B区 B層下五				横ナテ	ナテ	横 (5YR7/5)	横 (5YR7/5)	1mm以下の赤褐色粒を含む		
90	土師器	蓋	口縁～胴部	B区 B層				ナテ	ナテ	褐灰 (10YR6/1)	横 (5YR6/5)	3mm以下の透明・褐色光沢 粒を含む		
91	土師器	蓋	口縁～胴部	B区 B層下五				ナテ	ナテ	黄褐 (7.5YR7/5)	黄褐 (7.5YR7/5)	2mm以下の赤褐色粒を含む		
92	土師器	蓋	口縁	B区 B層				ナテ	ナテ	横 (7.5YR7/5)	横 (7.5YR7/5)	2mm以下の赤褐色粒、透明 光沢粒を含む		
93	土師器	蓋	口縁	B区 B層				ナテ	ナテ	横 (5YR7/5)	横 (5YR7/5)	2mm以下の乳白・赤褐色粒、 透明光沢粒を含む		

第3表 屋敷遺跡出土土器観察表(3)

遺物 番号	種類	形状	部位	出土地点 層位	法 量 (g)			手法・原料・文様ほか		色 澤		胎土の特徴	備 考
					口径	高さ	器高	外 面		内 面			
								外 面	内 面	外 面	内 面		
94	土師器	円	口縁～底面	B区 基層下土	(11.5)	4.9	4.4	回転ナテ	回転ナテ	焼 (7.5YR7/8)	焼 (7.5YR7/8)	きめ細やか、高部小窪を含む	へつ切り基
95	土師器	円	口縁村田 ～基層	B区 基層下土		5.6		回転ナテ	回転ナテ	灰白 (7.5YR/1)	灰白 (7.5YR/1)	2cm以下の赤褐色を含む	へつ切り基
96	土師器	円	体部～底面	B区 基層		(4.9)		回転ナテ	回転ナテ	焼 (5YR8/8)	焼 (5YR8/8)	2cm以下の褐色を含む	風化著しく底 部切り崩し不 明
97	土師器	円	基部	B区 基層		(5.8)		回転ナテ	回転ナテ	焼 (7.5YR7/8)	黄褐色 (7.5YR8/5)	2cm以下の赤褐色を含む	へつ切り基
98	土師器	円	基部	B区 基層下土		(3.4)		回転ナテ	回転ナテ	黄褐色 (10YR8/4)	黄褐色 (10YR8/4)	2cm以下の明褐色・灰白色を含む	風化著しく底 部切り崩し不 明
99	土師器	円or 皿	基部	B区 基層下土		(3.6)		回転ナテ	回転ナテ	黄褐色 (10YR8/4)	黄褐色 (10YR8/3)	2cm以下の灰白色を含む	風化著しく底 部切り崩し不 明
100	土師器	円	体部～底面	B区 基層		5.2		回転ナテ	回転ナテ	焼 (5YR7/8)	焼 (5YR7/8)	1.5cm以下の赤褐色・灰白色 粉、透明光沢を含む	底面円蓋状
101	土師器	円	基部	B区 基層		(5.4)		回転ナテ	回転ナテ	焼 (7.5YR7/8)	焼 (7.5YR7/8)	1cm以下の赤褐色を含む	底面円蓋状
102	土師器	円	基部	B区 基層		5.1		回転ナテ	回転ナテ	黄褐色 (7.5YR8/4)	黄褐色 (10YR8/4)	2cm以下の赤褐色・黒色粉、透 明光沢を含む	底の厚しく底 部切り崩し不 明
103	土師器	円	基部	B区 基層		(5.9)		回転ナテ	回転ナテ	黄褐色 (7.5YR8/4)	黄褐色 (7.5YR8/4)	2cm以下の黄褐色を含む	風化著しい、 底面円蓋状か
104	土師器	円	口縁	B区 基層下土				ナテ	ナテ	黄褐色 (10YR8/4)	黄褐色 (10YR8/4)	1cm以下の赤褐色を含む	へつ切り基
105	土師器	円	口縁～体部	B区 基層				回転ナテ	回転ナテ	焼 (2.5YR7/8) 濁灰 (10YR6/1)	黄褐色 (7.5YR8/5)	きめ細やか	
106	土師器	円	口縁	B区 基層				回転ナテ	回転ナテ	黄褐色 (10YR8/3)	黄褐色 (10YR8/4)	2cm以下の黒・褐色を含む	
107	土師器	円	口縁	B区 基層				回転ナテ	回転ナテ	焼 (7.5YR7/8)	焼 (5YR7/8)	2cm以下の赤褐色・灰白色、 透明光沢を含む	
108	土師器	円	口縁	B区 基層下土				回転ナテ	回転ナテ	焼 (5YR7/8)	焼 (5YR7/8)	2cm以下の黒・褐色を含む	
109	土師器	円	口縁	B区 基層				回転ナテ	回転ナテ	にぶい焼 (5YR7/4)	にぶい焼 (5YR7/4)	2cm以下の赤褐色を含む	
110	土師器	円	口縁	B区 基層				ナテ	ナテ	黄褐色 (7.5YR8/5)	黄褐色 (7.5YR8/5)	3cm以下の黒・赤褐色・灰 褐色を含む	
111	土師器	高台 付碗	基部	B区 基層		5.6		回転ナテ	回転ナテ	焼 (7.5YR8/5)	焼 (7.5YR8/5)	3cm以下の赤褐色を含む	底面放射状 筋線
112	土師器	高台 付碗	基部	B区 基層		(7.4)		回転ナテ	回転ナテ	焼 (5YR7/8)	焼 (2.5YR7/8)	2cm以下の灰白・灰褐色、黒 色光沢を含む	
113	土師器	高台 付碗	基部	B区 基層		5.8		回転ナテ	回転ナテ	焼 (5YR7/8)	焼 (5YR7/8)	4cm以下の赤褐色を含む	底面放射状 筋線?
114	土師器	高台 付碗	基部	B区 基層		7.0		回転ナテ	回転ナテ	焼 (5YR7/8)	焼 (5YR7/8)	1cm以下の赤褐色を含む	底面放射状 筋線
115	土師器	高台 付碗	基部	B区 基層下土		(3.3)		回転ナテ	回転ナテ	焼 (7.5YR8/5)	焼 (7.5YR8/5)	2.5cm以下の赤褐色・灰褐色を含む	
116	土師器	高台 付碗	基部	B区 基層		5.6		回転ナテ	回転ナテ	明赤褐色 (5YR8/5)	焼 (5YR8/5)	2cm以下の灰白・赤褐色を含む	
117	土師器	皿	基部	B区 基層下土		5.4		回転ナテ	回転ナテ	焼 (7.5YR7/8)	焼 (7.5YR7/8)	2cm以下の赤褐色・灰白色粉 を含む、高部小窪を含む	へつ切り基
118	土師器	円	口縁～底面	B区 基層	(8.0)	(3.2)	1.6	回転ナテ	回転ナテ	黄褐色 (10YR8/4)	にぶい焼 (10YR7/4)	きめ細やか	糸切り基
119	土師器	皿	口縁～底面	B区 基層下土				回転ナテ	回転ナテ	焼 (5YR7/8)	焼 (5YR7/8)	1cm以下の赤褐色を含む	
120	布織 土器	鉢	口縁～胴部	B区 基層下土	(15.5)			ナテ	布目表	焼 (5YR7/8)	焼 (5YR7/8)	5cm以下の黄灰・明赤褐色 粉を含む	風化著しい

第4表 屋敷遺跡出土土器観察表(4)

遺物 番号	種類	形状	部位	出土地点 層位	法 量 (cm)			手法・原料・文様ほか		色 澤		胎土の特徴	備 考
					口径	高さ	器高	外 面		内 面			
								外 面	内 面	外 面	内 面		
121	布瓶土器	鉢	口縁	8区 Ⅱ層	(14.0)			ナテ	布目肌	橙 (2.5YR/5)	橙 (2.5YR/5)	5mm以下の赤褐色粒を含む	黒化層しい
122	布瓶土器	鉢	口縁→胴部	8区 Ⅱ層				ナテ	布目肌	橙 (5YR/5)	橙 (5YR/5)	5mm以下の橙・赤褐・黒褐・灰白色粒を含む	黒化層しい
123	布瓶土器	鉢	口縁	8区32 Ⅱ層	(17.0)			ナテ	布目肌、割製肌	橙 (5YR/5)	橙 (5YR/5)	5mm以下の赤褐色粒を含む	黒化層しい
124	布瓶土器	鉢	口縁→胴部	8区 Ⅱ層				ナテ	布目肌、割製肌	橙 (7.5YR/5)	橙 (7.5YR/5)	7mm以下の橙・橙・灰白色粒を含む	
125	布瓶土器	鉢	口縁→胴部	8区 Ⅱ層				ナテ	布目肌、割製肌	明赤褐 (5Y5/5)	明赤褐 (5Y5/5)	4mm以下の洗炭粒・磁灰・褐色粒、黄色光沢粒を含む	
126	布瓶土器	鉢	口縁→胴部	8区 Ⅱ層下位	(17.0)			ナテ	布目肌	橙 (5YR/5)	橙 (5YR/5)	7mm以下の焼灰・明赤褐・灰色粒を含む	黒化層しい
127	布瓶土器	鉢	口縁→胴部	8区 Ⅱ層				ナテ	布目肌	橙 (5YR/5)	橙 (2.5YR/5)	4mm以下の灰黄褐・黒褐色粒を含む	黒化層しい
128	布瓶土器	鉢	胴部	8区 Ⅱ層		1.8		ナテ、割製肌	布目肌、割製肌	橙 (5YR/5)	橙 (5YR/5)	6mm以下の明赤褐色粒を含む	黒化層しい
129	土師器	甕	初手	8区 Ⅱ層下位				ナテ、割製肌		橙 (5YR/5)		2mm以下の明赤褐・灰黄褐・灰白色粒を含む	黒化層しい
130	須恵器	甕	胴部	8区 Ⅱ層				格子目叩き	割製状赤黄肌	黄灰 (2.5Y5/1)	黄灰 (2.5Y5/1)	薄灰	
131	須恵器	甕	胴部	8区 Ⅱ層下位				平行叩き	割製状赤黄肌	黒褐 (10YR2/1)	褐灰 (10YR/1)	薄灰	
132	須恵器	甕	胴部	8区 Ⅱ層下位				回転ナテ、格子目叩き	回転ナテ	黄灰 (2.5Y4/1) 緑黄灰 (2.5Y5/2)	黄灰 (2.5Y5/1)	薄灰	自然発色量
133	須恵器	甕	胴部付底	8区32 Ⅱ層				回転ナテ、格子目叩き	回転ナテ、割製状赤黄肌	黄灰 (2.5Y6/1)	黄灰 (2.5Y5/1)	薄灰	
134	須恵器	甕	胴部	8区 Ⅱ層				回転ナテ	回転ナテ	黄灰 (2.5Y5/2)	黄灰 (2.5Y7/2)	薄灰	
135	陶片	甕	口縁	8区32 Ⅱ層				施釉、刺刺文	施釉	(胎土) 灰白 (5Y9/1)	(胎土) 灰白 (10Y9/1)	薄灰	粘着系
136	青磁	甕	胴部	8区 Ⅱ層				施釉	施釉、刺刺文	(胎土) オリーブ黄 (5Y5/2)	(胎土) オリーブ黄 (5Y5/2)	薄灰	健康系系
137	陶片	甕	口縁→胴部	8区 Ⅱ層	(16.0) 外壁			回転ナテ、割製	回転ナテ、施釉	(胎土) 灰オリーブ (7.5Y4/2)	(胎土) 灰オリーブ (5Y5/4)	薄灰	粘着系

第5表 屋敷遺跡出土石器計測表(1)

遺物番号	種 類	出土地点	層 位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
47	石 鍬	B区	V	1.8	1.7	0.7	1.5	新島産黒曜石	Ia
48	石 鍬	B区	V	1.2	1.3	0.4	0.3	新島産黒曜石	Ib
49	石 鍬	B区	V	2.2	2.1	0.5	0.9	ガラス質火山岩	Ic
50	石 鍬	B区	V	2.6	1.8	0.5	1.3	新島産黒曜石	IIa
51	石 鍬	B区	V	2.0	1.9	0.4	0.8	新島産黒曜石	IIb
52	石 鍬	B区	V	2.4	1.8	0.5	1.3	新島産黒曜石	IIb
53	石 鍬	B区	V	2.4	1.8	0.5	1.4	新島産黒曜石	IIb
54	石 鍬	B区	V	(2.4)	(1.5)	0.5	1.0	ガラス質火山岩	IIb
55	石 鍬	B区	V	2.7	1.9	0.4	1.3	ガラス質火山岩	IIc
56	石 鍬	B区	V	1.7	1.5	0.3	0.4	ガラス質火山岩	IIc
57	石 鍬	B区	V	2.4	1.8	0.8	2.6	ガラス質火山岩	IIc
58	尖頭状石斧	B区	V	3.0	2.8	0.9	6.5	チャート	
59	スクレイパー	B区	V	2.6	5.8	1.9	66.1	頁 岩	
60	スクレイパー	B区SE1	埋土中	5.3	4.3	1.5	34.8	チャート	
61	スクレイパー	B区	V	8.7	4.7	1.1	25.8	頁 岩	
62	スクレイパー	B区	V	3.0	1.8	0.7	2.0	新島産黒曜石	
63	二次加工削片	B区	V	1.4	2.4	0.5	0.9	新島産黒曜石	
64	二次加工削片	B区	V	4.6	3.4	1.0	13.9	新島産黒曜石	
65	使用痕削片	B区	V	4.1	2.6	1.0	7.0	新島産黒曜石	
66	使用痕削片	B区	V	1.5	1.5	0.4	0.6	黒曜石	
67	使用痕削片	B区	V	6.6	3.8	0.9	15.1	新島産黒曜石	
68	削 片	B区	V	1.5	2.0	0.4	1.5	チャート	
69	削 片	B区	V	3.3	3.8	1.2	9.1	チャート	
70	削 片	B区	V	6.2	8.8	2.6	141.8	頁 岩	
71	石 槌	B区	V	2.6	3.0	1.0	7.1	チャート	
72	石 槌	B区	V	3.0	3.1	1.3	9.7	新島産黒曜石	
73	石 槌	B区	V	3.1	3.5	1.9	16.4	新島産黒曜石	
74	打製石斧	B区	I	12.6	8.2	2.1	176.6	砂 岩	
75	打製石斧	B区	V	15.1	8.3	1.3	221.0	ホルンフェルス	

第6表 屋敷遺跡出土石器計測表(2)

遺物番号	器名	出土地点	層位	最大長(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	重量(g)	石材	備考
76	四角磨製石斧	B区	V	(6.5)	5.0	2.0	78.9	綠頁岩	
77	四角磨製石斧	B区	V	8.5	4.3	1.3	54.0	細粒砂岩	
78	磨石	B区	V	8.3	6.9	2.0	153.3	砂岩	
79	磨石	B区	V	14.8	12.0	6.3	1600	溶結凝灰岩	
80	磨石	B区S E 1	埋土中	8.0	7.7	5.6	542.5	砂岩	
81	石錘	B区	V	(5.7)	7.2	1.6	98.3	砂岩	
82	斧石	B区	V	14.9	14.7	8.0	3000	砂岩	
83	台石	B区S I 2	埋土中	27.7	25.2	12.8	9400	砂岩	
90	磨石	A区Q 7	Ⅱ	5.0	3.8	3.0	74.5	砂岩	A区出土
11	磨石	A区SH 2	埋土中	(10.8)	8.2	6.3	1038	砂岩	A区出土

第7表 屋敷遺跡出土錢貨觀察表

遺物番号	器名	銭貨名	出土地点 層位	銭径(m)	銭孔径(m)	重量(g)	鋳造年号	背文	備考
12	銭貨	富永通宝	A区P 6 Ⅱ層	2.3	0.8	1.6	富永		
13	銭貨	富永通宝	A区Q 7 Ⅱ層	2.5	(0.7)	2.2	富永	文	
14	銭貨	富永通宝	A区Q 7 Ⅱ層	(2.3)	0.8	3.6	富永		

第IV章 まとめ

屋敷遺跡からは主にB区を中心として縄文時代早期の集石遺構と土器・石器が出土し、A区、B区ともに溝状遺構が検出されている。以下得られた情報をもとに概要を整理することでまとめにかきたい。

検出遺構について

集石遺構は第13回九州縄文文化研究会の集成¹⁾(2003年)によると、高岡町内では7遺跡97例(報告書刊行分)が確認されている。同町、大淀川北岸の久木野遺跡²⁾では構成礫の接合関係から散礫の形成に集石遺構が関わっていることや、礫の分布状況から複数回にわたり使用されていることが確認されている。近接する橋山第1遺跡³⁾では、貝殻文系土器群とともに縄文時代早期の集石遺構30基が検出されている。本遺跡で確認された集石遺構は2基であるが、掘り込みの有無など形態上の差異が認められる。

溝状遺構は、A区で5条、B区で4条が検出されている。A区については、溝状遺構は5条ともほぼ東西方向に延びており、わずかな走行軸の違いはあるものの、ほぼ平行に走っており、検出面での幅は約0.3～0.5mである。最も残存状況の良好であった1号溝状遺構(SE1)は、東から西方向に向けて緩やかに傾斜し、西側に広がる沖積地へ延びる。同遺構の埋土内から布痕土器の底部が出土している。また、溝状遺構の西側を中心にピット群が検出された。掘立柱建物として復元できるものはなかったが、その埋土状況から同時期である可能性が推定される。溝状遺構との関連についての詳細は不明であり、今後の検討を要する。B区については、溝状遺構(SE2・4)に囲まれた範囲に布痕土器を主体とする古代の土師器類が集中しており「屋敷」の字名が示すとおり、何らかの区画の役割を担っていた可能性がある。

出土遺物について

縄文土器42(第15図)のようなコブ文のある土器は早日渡遺跡⁴⁾(延岡市北方町)に穿孔をもつものに類例が認められる。形状は異なるが天ヶ城跡(宮崎市高岡町)からもコブ文をもつ土器が出土している。九州内では大分県に出土事例が多く、縄文時代早期の無文土器の一群と供伴関係にあるとされている。屋敷遺跡では前平式土器の小片と無文土器の可能性のある小片の出土がみられるのみであり、大きくは塞ノ神式土器や苦浜式土器などの出土から縄文時代早期末を中心とした時期が想定される。

石器については、アカホヤ火山灰の残存するB区丘陵側に出土がみられ、打製石鏃・石核・剥片・スクレイパー・局部磨製石斧等が出土している。打製石鏃については出土11点中、6点が姫島産黒曜石製であり、5点がガラス質安山岩製である。このガラス質安山岩も姫島産と考えられ、出土した遺物すべてが姫島産といえる。他にも遺跡内から出土した石器をみても、石斧・磨石・台石等を除くと姫島産黒曜石が石材の約48%を占め、ガラス質安山岩を含めると約67%が姫島産である。こうしたことから、屋敷遺跡の縄文時代早期には東九州地域との密接な交流がうかがえる。

(註)

- 1 九州縄文研究会『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』2003 第13回九州縄文研究会宮崎大会
- 2 高岡町教育委員会『久木野遺跡(1区～4区)』1997 高岡町埋蔵文化財調査報告書第12集
- 3 高岡町教育委員会『橋山第1遺跡(A・B区)』1996 高岡町埋蔵文化財調査報告書第9集
- 4 宮崎県教育委員会『早日渡遺跡』1995 一般国道218号椎畑バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 5 高岡町教育委員会『天ヶ城跡』1998 高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集

图 版



調査区遠景（手前からB区、A区、奥は大淀川）



A区全景



B区全景



A区近景 (東より)



B区近景 (北より)



A区溝状遺構調査風景



A区石組遺構（北より）



B区西側土層断面



B区溝状遺構完掘状況（西より）



1号集石遺構（北より）



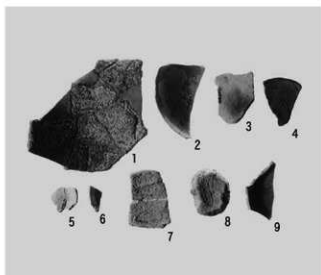
1号集石遺構完掘状況



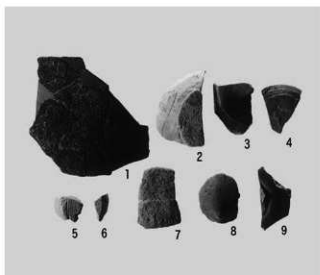
2号集石遺構（北より）



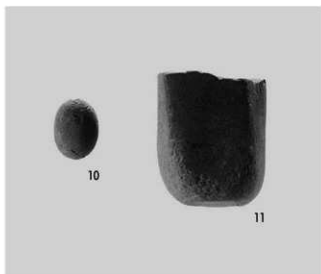
2号集石遺構完掘状況



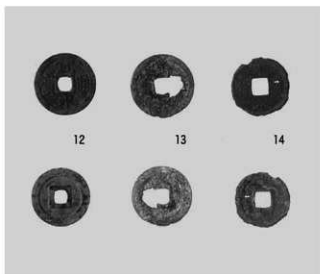
A区出土遺物（内面）



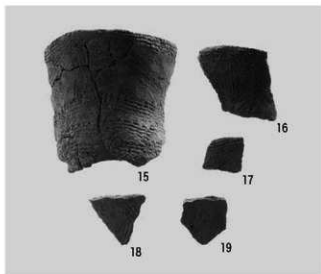
A区出土遺物（外面）



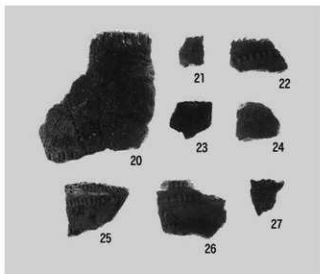
A区出土石器



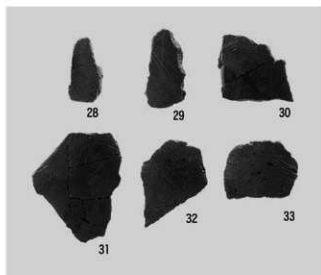
A区出土錢貨



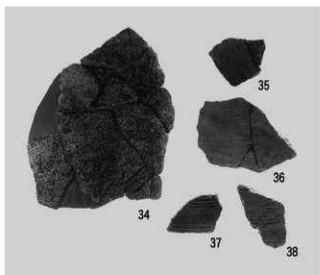
縄文土器（口縁Ⅰ類）



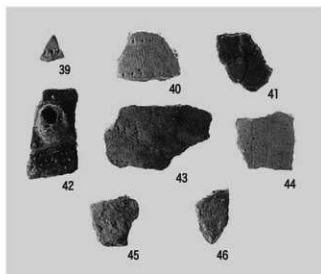
縄文土器（口縁Ⅱ・Ⅲ類）



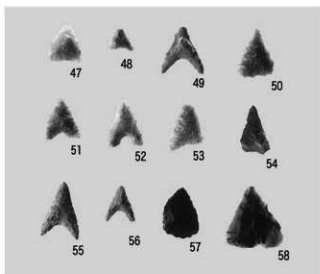
縄文土器 (胴部 I 類)



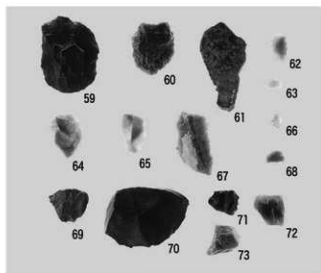
縄文土器 (胴部 II・III 類)



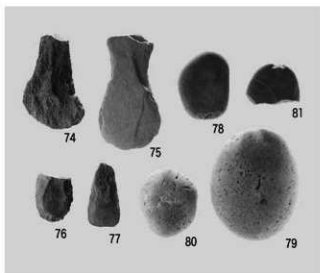
縄文土器 (胴部 IV・V 類、底部)



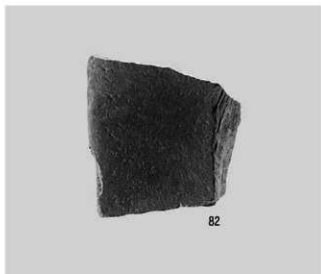
石器 1 (石鏃・尖頭状石器)



石器 2 (剥片・石核)



石器 3 (石斧・磨石・石錘)



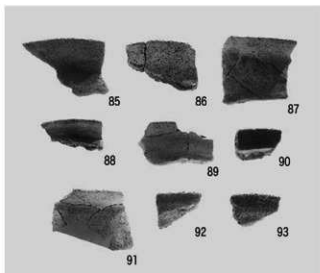
石器 4 (台石 1)



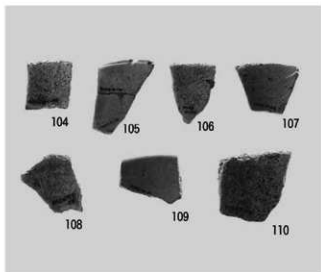
石器 5 (台石 2)



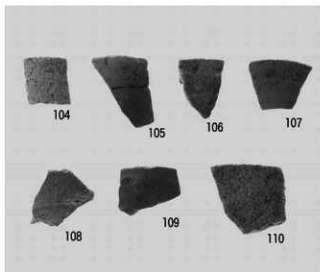
出土土器 1 (高环)



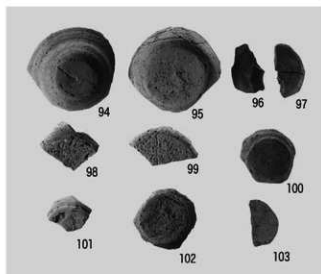
出土土器 2 (残)



出土土器 3 (内面)



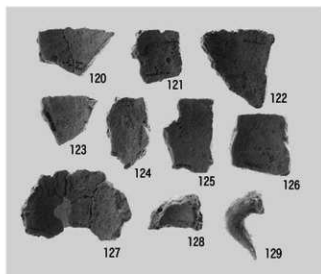
出土土器 3 (外面)



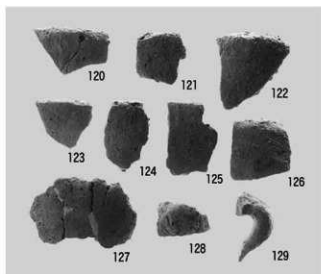
出土土器 4 (坏)



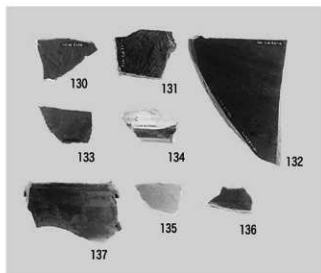
出土土器 5 (高台付碗)



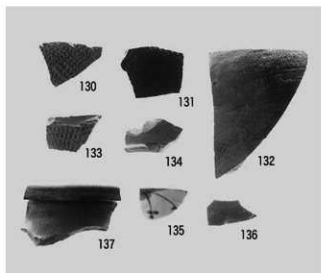
出土土器 6 (内面)



出土土器 6 (外面)



出土须惠器・陶磁器 (内面)



出土须惠器・陶磁器 (外面)

報告書抄録

ふりがな	やしき						
書名	屋敷遺跡						
副書名	一般国道10号花見改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	第1集						
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第138集						
編著者名	橋本 英俊						
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地						
発行年月日	2007年3月9日						
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
やしきいせき 屋敷遺跡	みやざきしつかほまちあじのゝやしき 宮崎市高岡町花見字屋敷	31°56'34" 付近	131°56'34" 付近	2001.05.15 } 2001.09.04	3,788㎡	道路建設	
	コード						
	市町村						遺跡番号
	452017						—
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
集落	縄文時代早期	集石遺構 2	塞ノ神式土器 石敷・局部磨製石斧				
	古代・中世	溝状遺構 9 ビット	土師器・須恵器 青磁・陶磁器				
	近世		陶磁器				

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第138集

屋敷遺跡

一般国道10号花見改良事業に伴う発掘調査報告書

平成19年3月

編集・発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660
印刷 株式会社ヒダカ印刷
〒880-0862 宮崎市潮見町13-5
TEL0985(28)4113
